

庚申爪游雜記

11
479

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始





炎河之原七郎若

著者寄贈本

庚申爪游雜記

枕山樓名樓花標

大正
10.8.22
寄贈



人集詩之何
時之來也
潤如星自
辛酉初友米高與人



序

畢竟は陌上の塵に異ならぬといふ人生を、何をくよく川端柳などと悟つたわけでもないけれども、朝に落花を逐うて去り暮に流水に從うて歸るといふやうな悠々自適の境地が戀しくなり、昨秋多年の職務を一擲して後は、暫らく浩然の氣を養ふ可く、好む所を恣にせうと豫期したのであつたが、さて愈、閑地に就いて見ると、研究して見たいと考へてゐた社會事業の調査も事實當つて見れば事なか／＼面倒であつたり、豫てから學ぼうと志した一二の文藝も覗きかけると奥行が深かつたり、道樂にやりかけた二三の遊戯三昧も案外に時間を費したりするのに、搗て、加へて從來の關係會社からも時々は召集されたりするの、で、なか／＼京地を去ることを許さず、第一好物の旅行さへ思ひの儘に

は出来ないのであつた。

然るに本年六月の末に越後青梅の多年關係した會社から株主總會へ出席しろと要望されたので、序に久方振金澤へも歸省して見たい、さうすれば又其序に能登の奥郡へ遊びたいといふ多年の宿望をも果したい、どうせ道序だから新潟地方や佐渡ヶ島をも一見に及びたいなど、遊意が動き出すともう如何ともする事が出来ない。其處で少々無理ながら三週間の暇を作つて草廬を出た。さて愈出て見ると汽車やら汽船やら乗合自動車やらそれ〴〵便利な交通機關が鄙邊にも行渡つた今日に、未だそれすら出来てゐないほどの諸事不自由な僻地へ何の用事もないのに態々足を勞して隈なく遍歴するのも少々茶氣が多過ぎると考へると、其處迄踏込む勇氣も失せたので、大抵にして切上げ當初豫期した道程の半にも達せず且つ親戚の訃音に接し匆々歸京を餘

儀なくされたのであつた。従つて今回の旅行には左したる面白き談柄もないので、その紀行も筆を執るに懶く數ヶ月も放擲し、やめにせうと決めてゐる處へ、例の物數寄の知人から、何か書かなければ主義の一貫を缺くぢやないかなど勧められ中には頻りに催促がましく言つてくる連中もあつたので、敢て煽動に乗るわけではないが、主義一貫首尾具足は一理あることだから、勇を鼓して此頃漸く秃筆を嚙り既に臙氣な記憶を辿つて春雨の雨垂式にほつ〴〵書き綴つたのが此の日記である。感興既に去り氣合甚だ乗らないのに強ひての製作品だから固より知友を失望させることは承知の助だが、是れも主義一貫の上から仕方なく例によつて剗刷氏の手を煩し知己諸君の座右に致す次第である。尙親友奥田松坡君曾て奥能に遊び甲寅羽鳳行記の著作があつて、其事と其文と共に余が企及し得ぬ所があり、今回余が道路險惡の爲

め果さなかつた行程であるから、請うて之を附録とし、余が文の補遺とすることゝした。此部分は必ず讀者を満足させることゝ信ずる。

又卷末の「越路のゆき」は未だ人に示す程のものでもないが、元來の本強漢乍ら近來少しく餘閑を得たので鬼神も泣かしくめ武士の心も和げるといふ國風の道に志してからの初旅であるから遠慮なく附録とすることゝした。著想の淺膚と修辭の粗笨は初學のことだから見逃され、唯だ其意のある所を酌まれんことを望むのみで、固より讀者の一粲を博さんなどの野心は毛頭ないのである。

大正十年三月

省 齋 河合辰太郎識

庚申北遊雜記目次

序

一	上野から金澤へ……………	一
二	墓参と訪友……………	六
三	高岡見物と寶圓寺詣……………	三
四	七尾を経て和倉へ……………	三
五	輪島見物……………	六
六	舊知尋訪……………	五
七	總持寺参詣……………	四
八	小舞子の省老……………	四
九	新潟一瞥……………	五

目次

十 佐渡ヶ島 上、中、下……………六

十一 岩越線から歸京……………八七

跋 奥田頼太郎氏

附録

越路のゆき、

甲寅羽鳳行記 奥田頼太郎氏

北遊雜記竝に羽鳳行記の後に記す 上原直松氏

目次畢

庚申北遊雜記・

省齋 河合辰太郎著



人生は逆旅だといふ。其の逆旅に在り乍ら、一處に住することの寂
 寞さに堪へかねて、更らに旅より旅へ彷徨ふことの物好きさを笑ふも
 のは笑へ、余は到底都塵の裡にのみ埋つて、無變化の天地に安住するこ
 との出来ない性分なのである。されば今茲大正九庚申の年、春の名残
 の藤さへ散つて、青葉に初鯉魚の出るてふ六月廿四日の宵に、淋しくも
 孤り都の蝸廬を這ひ出でて、羈旅の客とはなつたのであつた。

一 上野から金澤へ

上野から金澤へ

熟路は夜汽車で寐て行くに限る。上野から故郷の金澤まで、もう幾度往返したか數へられぬほどの熟路である。其處で例により午後八時上野驛發の寢臺車に投じた。車中には生憎く語るべき知人も乗合はせず、夜のことゝて風物の見る可きもなければ、また携へた二、三夕刊新聞を見るのも懶く、十時頃に早くも寢臺上に横はり、好物の更科蕎麥さへ食ひ外して無何有の郷に入つた。

夏の短夜は直江津驛にあって目が覺める。此處からは縹渺たる日本海の煙波を眺め、朝陽に狂ふ濱千鳥の鳴く音を聽くなど、朝心地が爽かであつた。午前七時過青海驛に入つて下車した。直に人々に迎へられ、村田氏の宅に行つて余が主宰せる石灰會社の役員諸氏と會合し、種々事業上の相談に時を移した。午後二時から青海水電會社の株主總會に臨席した。余が此驛に下車した要務は此會に望まんが爲め

であつた。本會社は本期無配當を忍ばねばならぬほど成績不良であつて、株主中にも不満足らしい顔色が多く見受けられたのであつた。蓋し昨年は歐洲戰爭の影響を受けて此會社のカーバイト製造が豫想外の好況を呈し五割の配當をしたのであつたが、本年に入つては水害の爲め發電所が大破し休業の止むなきに至つたのみか修繕に多額の經費を要したるさへあるに、更に製品の大暴落を來したといふ、重ね重ねの災害やら不景氣やらで支出増大したるに反比例して収益が頓に減少した爲めである。固より事業の盛衰は免れ得ない所であるが、前期の利益配當は餘りに樂觀に過ぎたと今更當局者の無算當を憾む聲も高く、不平滿々の裡に總會を終つた。良將は勝つて兜の緒を緊めるといふが、好景氣に浮かされず、能く兜の緒を緊め得た事業家は世上に餘り多くも見受けない。當會社の重役にのみ良將たるを望むことも

出来ないが、今少し慎重の考案が欲しかつたやうな氣もせぬでは無かつた。

總會を終るや間もなく藤田、伊藤の兩取締役と共に停車場に驅つけ、四時頃西行の列車に投じ、車中同社前途の經營等について意見を交換して居る間に汽車は早くも富山驛に著いた。兩氏と袂を別ち、獨り窓外の懐しき山川を送迎しつゝ、午後七時故郷金澤に到着した。

金澤驛を出ると電車の走るを見受けた。物珍らしさに荷物は出迎への人々に託し、電車に乗つて見た。余に取つては故郷の町の電車の初乗なのである。一昨年の春歸郷した時には未だ盛んに工事中であつたのだが、其年の暮れに開通したと聞いたばかりで、百株以上の株主であるとして優待の無賃乗車切符を贈られてはゐるもの、百里を距つてゐる所を態々乗りに来るわけにも行かないので、眼前に見るのは今

が初めなのである。乗つて見ると中々氣持がよい。第一に車中が混雑しない。これは東京のやうに混雑する方が繁盛なのだが併し乗心地は此方がよい。次に車臺が東京のよりも廣いやうで、網棚もあつて荷物を持ち込み得るやうに出來てゐること東京の京濱や山の手線のやうであるから頗る便利だ。電車は進んで白銀町安江町通を経て武藏辻に出る。此處から線路は東西に分れる。東は尾張町通から淺野川橋に至り更に小立野に達するもの、西は堤町南町石浦町を経て片町犀川大橋に達し、川を越して野町を通じ松任線に連絡するものである。余等は西行に乗つて犀川大橋で下車した。此橋は既に鐵橋が架つて其壯觀は昔日と面目を一新してゐるが、未だ電車を通ずるに至らない。其先きは目下頻りに家屋の移轉中であるから、近く開通を見る事であらう。斯く該工事の進捗したのは、此の會社及び市の當局者が苦心と

盡力の容易でないことを想はしめるのである。

此處から蛤坂を上り、寺町へ出て古今亭に入つた。例により「風光第一樓」の室に案内せられ、久方振りに忘れがたい故郷の趣味に飽くことを知らず、亭主等と四方山の談笑に時を移し、更闌けて寢に就き安らかな夢に入ることを得た。

二 墓参と訪友

目覺むれば廿六日。起きて盥嗽に行くと、空は晴れてゐる。北國の夏の夜あけほど静かで爽かな中に落付いた氣分に充ちてゐるのも稀だ。此の爽快な中に、何はさて置いても墓参をせねばならぬと、盥嗽を終ると其儘に徒歩で踏み出した。目ざす所は言ふ迄もなく野田山に在る亡き父母の墳墓である。來て見れば思つたほど荒れても居ない

のが何より嬉しく、恭く墓前にぬかづき冥福を祈つた。

歸路は道の順で實相寺を過つて恩師久田竹軒先生の墓を拜した。此の途中兵營の門前に新らしき碑が建つて居るので近いて見ると、市坊仁太三太兄弟の孝子と義士高橋右門との旌表碑であつた。此等孝子義士の遺蹟は草裡に湮滅せんとしてゐたのであるが、近頃陸軍大尉赤尾壽保、松本松次郎、安江太兵衛三氏の盡力によつて市坊仁太の二人が返討に逢つた遺蹟たる此處に建碑されたのである。其の事蹟の大要は碑文中に左の如く刻まれてある。

今を距る三百二十三年慶長二年三月二十五日石川郡曾谷村に於て百姓三平及び其の子三五兵衛は加賀藩士山田權左衛門の爲に慘殺せらるる時に三五兵衛三子あり長を市坊、仲を仁太、季を三太といふ皆幼弱なるを以て市坊及び仁太の二兒は末家間平に三太は

他家に養育せらる市坊及び仁太年齒漸く長し祖父及び父の横死を知るに及びて深く之を悲しみ心窃に其の報復を期す然れとも身農家に生れ師を求め劍を學ふに由なく纔かに業務の間を偷み互に相撃ち以て其の術を研むるのみ斯くて慶長十五年七月十五日市坊兄弟は權左衛門の野田山なる藩祖の墓に詣つるを聞知し其の歸路を十一屋村端に要して之を撃つ權左衛門其の從者をして之を殺さしむ偶藩士太田但馬守の遺臣高橋右門故ありて名を小平と改め飴を鬻きて同所にあり權左衛門の非道を憤り天秤棒を揮つて忽ち從者を撲殺し更に權左衛門に迫る權左衛門素より其の伎倆を知る即ち倉皇馬に鞭つて城下に逃走す右門之を追跡せしも遂に及はす再ひ十一屋村に還りて自ら及に伏せり其の後間平は三太に告ぐるに父祖及び二兄の事を以てす三太始めて其

の實を知り悲憤措く能はず直に人を介して藩の劍客齋藤金平の從僕となり暇あれば道場を窺ひ夜は獨り其の術を講す金平其の志の厚きに感し之を若黨となし弟子に伍して學習せしむ此に於て三太銳意尅勵竟に其の蘊奥を極め私かに時の到るを待つ斯くて元和元年七月十五日仇敵權左衛門の再ひ野田山に詣つるを探知し十一屋村端に邀撃して之を殪し始めて積年の宿志を遂く時に年十九三太一旦自裁せんとせしも藩主の恩命に依りて其の死を免し特に藩士の列に加へらると云ふ

之を自由民權の認められ國法の整備した現代の道德觀よりすれば、論議せらる可き餘地のあるのは勿論であらう。併し世道人心の頹廢墮落し、舉世滔々として私利の爲めに鬭争是れ事とし、國民思想の全く猶太化せんとしつゝ、ある今日、斯の孝子義士旌表の擧は最も意味深き

を思はしめるのであつた。

これから承證寺に来て、養親の墓前に跪き、歸郷第一の目的を朝飯前に果したので頓に身心の輕爽を覺えた。

朝食を了ると鱗町に親友奥田松坡氏の病床を訪ふた。君は元來頗る剛毅な氣質で、物質より超越し死生を脱離してゐる氣味があり、其點は余の到底及ばざる所であるが何故か時々瀕死の重病に冒されるのである。四年前にも重病に罹つて、生死の間を往來してゐたのに、幸に全快して、昨秋は上京をするなど、中々の元氣を見受けられたのであつたが、今春多年盡力してゐた七尾中學校長を辭すると間もなく動脈硬化といふ難症に罹り、一時は又々瀕死の境を彷徨してゐたと聞いて、余は竊かに頭を悩ましてゐたのであつたが、今來て見ると、未だ病褥を離れずに居るが、病勢は次第に薄らぐ傾向で、さして衰弱したとも見受け

られず、余を見るや、よく來て呉れたと言つて喜ぶ其の溫顔は平常とさしたる相違もないかに思はれたので、余も聊か意を安んずることを得たのである。君の如きは所謂病上手の死下手であるなど言つて、往を談じ今を語り覺えず時を移したので、餘り長座は却つて病の毒だらうと氣附いて辭去し、其足で直ちに本多町に本多男爵を訪ねた、然るに君も亦動脈硬化の難症に罹られ、奥田氏のそれよりは病勢猛惡の趣で、往年の意氣今見る可くもなき有様で、如何にも痛ましく殊に同情に堪へられないので、此處も長居は無遠慮と匆々に辭去した。知己の一人ならず二人までが老人病に悩むのに逢ふて、今更のやうに人生の須臾なるを感じ、寂寞の情を禁ぜられないのであつた。

四五の親戚故舊の歴訪に半日を費し、午後四時頃歸宿すると、鈴木俊三郎氏に來訪され、共に素謠數番を吁鳴つて、快い晚餐に就き、談笑して

身の旅窓に在るを忘れるのであつた。

三 高岡見物と寶圓寺詣

翌廿七日朝の空は晴れてゐた。昨夕來訪を受けた鈴木俊三郎氏が舊藩公前田家の代拜として今朝高岡の瑞龍寺に參詣せられると聞いたので、自分も前田家の基礎を固うした利長公の廟所に參拜したく、且つ久し振りに高岡市も一見したいと思つて同行を約した。然るに旅宿の女將も同行を望むので、相伴つて午前八時金澤驛に行つて鈴木氏と落合ひ、車を同うして駛すること約一時半で高岡に著き、直に瑞龍寺へと俥を驅つた。

寺は高岡市外下關村に在る。驛から十五町だと聞いてゐたが停車場を出ると、伽藍の屋根とおぼしきものが、滴らんとする積翠の間には

の見えるてゐるので、先づ其の規模の小さいのを思はせた。愈、門前に到著して見ると、遠が前田利常公が、其先世利長公の冥福を祈らん爲めに建立せられただけあつて、如何にも宏壯な七堂伽藍の巨刹である。宗旨は曹洞禪、境域三萬三千餘坪、支那で有名な經山萬壽寺の制を摸して建築したものであるといふ。維新前は前田家から寺領三百石を附し、且つ修繕保護にも意を用ゐられたが、廢藩後は維持保存の途を失ひ、境内の樹木を伐採して其材を賣り、城内の地を拓いて耕作させたりして、焦眉の急を救うてゐたのみであるから、殆んど荒廢して舊時の偉觀と森嚴とは大半失はれたけれども、百萬石大藩の力で造營した大伽藍だけは今猶ほ儼存して居り、地方有志鳥山敬二郎氏等の盡力で百方維持方法を講じ、明治四十二年に特別保護建造物に認定せられたので、どうか昔の佛を留めることが出來てゐるのみであるが、それでも猶ほ

鄙には稀觀の靈域である。

吾等一行が玄關に到着すると、住職は慇懃に迎へられた。先づ利長公の靈壇に恭しく禮拜を了つて後、各佛殿に案内せられて、ゆつくり拜觀するの榮を得た。何れも丹碧相映し、結構善美を盡せるものであるのに、今更のやうに歎賞の聲を放たざるを得なかつた。利常公寄附の十三佛を始めとし、兆殿司の羅漢、雪舟の達磨、探幽齋の觀音など、其他種種の由緒ある寶物に富でゐるといふことであつたが、それ等の拜見は遠慮して、前庭へ出て山門の下に立つて「高岡山」と題せる隱元禪師の雄渾な筆勢を仰ぎ、好きな道として低徊之を久うした。

此處から八町許り參道を歩むと利長公の墓所に達するのであつた。墓域は約一萬坪、鬱蒼たる老樹の間に石燈籠が數十基も散在してゐる。森嚴な光景を眺め乍ら進むと墓前に著く。恭く一揖して眼を放つと、

井然たる石柵に圍まれて丈一丈二尺幅三尺の大石碑が蓮花彫刻の石壇上に立つてゐる。其表には「贈正二位行權大納言兼肥前守菅原朝臣利長之墓」と刻まれたのが明かに讀まれる。柵外は四邊に池を環らし、橋を架し參差たる老樹が今や若葉に裝を改めて、清淨閑寂の感を深うしてゐる。公が先代利家公の後を承けて徳川幕府猜疑の間に立ち能く其勢力を保持せられたのは、智仁勇兼備の大將であつたからである。その大封百萬石の基礎を定めた英魂が此處に眠つてゐるかと思ふと、覺えず襟を正させるのであつた。

參拜を終つて寺門を出ると未だ時間が早い。高岡公園を見ようと俥を東に走らせた。此公園は利長公が築いた舊城址で、如何にも形勝の地を占めて居る。蓋し公が時運若し非ならば此城に立籠り礪波山の險難に據つて徳川氏に抗し天下三分の計をなさうと覺悟したのだ。

と傳へられるが、來て見ても確に其覺悟があつたらしく想はせるほど規模が雄大である。然るに天下は太平で利長公の心配も杞憂に屬し、利常公が此處より出でて金澤に移られてから荒蕪に委せられることが二百餘年に及んだけれども、城壕は其儘に存し風物却つて古蒼にして舊態を偲ばせるので、明治八年に改修して公園にしたのである。面積は六萬三千餘坪、風光亦佳絶で今では全國中でも屈指の公園となつてゐる。園の中央に瓊々杵尊を祀つた射水神社が國幣中社に列せられて居るだけの莊嚴さを示してゐる。此のほとりに近年瑞龍前田公遺徳碑が建てられて人目を惹いて居る。其の太平臺に佇んで四顧すると、西方には二上山の翠微が眼前に媚を呈し、北には庄川小矢部川の二水が蜿蜒として廣野を貫いて伏木港に注いで居る。其の港の東には白波の寄せてはかへす有磯海も眺められ、眞帆片帆の漁舟の浮ぶの

が白鷗かと過たれる。東には立山や劍ヶ峯などの峻嶺が白雲を頂いて蒼空を摩して居る。眺望の雄大にして佳絶であること斯んな公園も蓋し稀だと言ひたい。それに園内には到る處に青松や楓樹が枝を交へて蔚蒼と茂つて居る間に梅櫻が點綴して居り、池もあり丘もあり亭榭の憩ふ可きもあり、林泉の趣致も亦宜しきを得てゐるから、四時曳杖の客が絶えないのも當然である。彼方此方と漫歩してゐる内に、丘の一隅に銅像が立つてゐるので近いて見ると稻垣示氏の銅像であつたので、余をして少からぬ感動を起させた。氏が此地方に於ける民権家の泰斗で、自由民権の爲に盡瘁した事は世人の知る所である。君が石川縣會議員であつた頃に、議場で時の縣令千坂高雅氏の私行を許した。その言論が官吏侮辱罪に問はれて處罰された事があつた。其時恰も余は縣會の書記を勤めてゐたが、余の筆記が唯一の證據物となつ

て處罰されたのであつた。余は非常に氣の毒な感を抱いたが事實有りの儘の筆記で何の誣ふる所もないのであるから止むを得なかつた。議場の言論で刑法に問はれるなどは今日では夢想することも出来ない事であるが、四十年前には斯様な事實があつたのである。爾來民權の發達は滔々汨々として今日に至つたので、往事を追懷すれば轉た隔世の感を引き起させるのである。

斯んな事で時を移してゐる間に一天俄かに搔曇り今にも驟雨にならうとするので急いで俵を命じ市街を横斷して物産陳列場へ驅付けした。陳列してある重要物産の内で銅漆器は慶長年間に利長公が保護奨励の下に創められたもので其沿革が最も古く、今日の發達は偶然ではない。事務員から懇篤な説明を得て記念として漆器三四點を購つて此處を辭し櫻馬場を過つた。此處は利長公在城の頃に騎射場とし

て設けられたもので、兩側に櫻を植列ねてゐる。今猶ほ花時は驛客で殷賑を極めるさうである。此處から一走りで驛前に著いて目立つのは亭々雲漢をつくの老杉である、今は一本残るだけだが以前あつた數によつて七本杉と呼び千年以上の靈木で火難除の守護神とし崇められてゐる。其傍の梅松園に入り、午餐を攝つた。蓋し當市第一の旗亭で建築も宏壯、庭園も整備し、田舎のものとも思はれぬほどであつた。

高岡見物も午前中で卒業した。何んでも人口三萬六千、戸數八千と數へられて居るさうだが、北陸と中越と二鐵道との交叉點であり、市の北を流れる小矢部川によりて伏木港に通じてゐるから水陸ともに運輸の便があるので商況が活潑なる中にも米穀の取引が最も盛であり、工藝品にも富んで、國中で富山と併稱せられてゐるが寧ろ之を凌駕してゐるやうに見受けられるのであつた。

餐後二時過發の汽車で此地を去り金澤へ歸つた。電車に乗つて武藏辻で女將と別れ、淺野川方面に乗換て尾張町を過ぎ枯木橋の下から右折して味噌藏町を通り尻垂坂(此處から百間堀の埋立地を通じて廣坂通りへ出る線もある)から公園の外郭を繞つて小立野に上り、病院前の終點で下車をした。郷里にもこれだけ電車が開通したと思ふと嬉さをそゝられるのであつた。四五町を徒歩すると寶圓寺の門前へ出た。此處は曹洞宗の巨刹で前田家菩提所の一つである。利家卿の歸依せられた大透圭徐禪師を開祖とし文祿三年に建立せられたもので、堂塔古蒼また一見の價値がある。殊に墓所には吾邦中世の繪畫界に一新紀元を劃したと稱せられる俵屋宗達や小野慈善院の創設者として令聞ある小野太三郎氏の墓などもあるので、一々敬意を表して此處を出で電車で兼六公園に入り、新緑に包まれた山崎山を登り、頂上で小

憩をして四方山の話に耽つて鈴木氏と別れ、折ふし降りしきる雨を衝いて歸宿した。すると一息する間もなく飯尾市長から電話がかゝつて、晚餐を共にしたいと招かれたので、早速腕車を命じ淺野川上流の鮎屋へ行つた。臥龍山を背後に控へてゐる處だから、庭には自然生の老樹が茂り清泉が逝り、淺野川の淙々の水音も耳に近く、其堤上の松竹梅柳も望むべく、それを渡つて來る風の涼しさなど、まことに得難き景致で、自然を庭に取入れてゐる所は造庭の巧を極めたものといふべく、頼に人寰を離れて仙境に入るの想ひあらしめる。朝來高岡を始め、處々奔走して被つた忙塵も綺麗に洗はれてしまうのであつた。況んや今夕の主人が、遠來の客に舌鼓を打たせうとて特に意を用ゐられた川魚の珍味があり、旅愁を慰めようとして侍せしめた東廊の阿嬌も居るのだもの、耳目肺腸何れも飽滿せざるを得ないので、厚く其粹意を感謝し、興の

盡くるところを知らず、更闌けて猶ほ別を告ぐるを忘れしめたのであつた。

四 七尾を経て和倉へ

能州めぐりを思ひたつて、雨を冒して七尾線列車に乗込んだのは廿八日の午前八時半であつた。津幡驛に近くなると河北潟の眺めが車窓に入る。暫くすると寶達山が見え、木曾冠者が平軍を鏖殺した俱利伽羅の峠も望まれる。俱利伽羅から分岐して半島へ流れる能登の連山は、次第に其高さを減らしてゐるやうにも思はれる。此處らあたりから、そろ／＼桃畑が見え、花は散つたが小圓い實が青葉に隠れ顔である。所謂木津の桃で幼ない時には好んで食うたものであると、様々な昔が想ひ出されるのであつた。宇野氣・高松などを経て能登に入り寶

達驛に著くと知友田邊又五郎氏が出迎へられるのを見た。蓋し氏が經營せる石灰事業を見るの宿約があつて今朝電照したからであつたが、折悪しく雨が歇まないのので、歸路にと約し失敬して次なる敷波驛で下車した。

驛頭に出迎へられた岡野保雄氏の令弟保次氏に導かれて五六町を歩み同氏の邸宅前を過ぎ、其先考是保君の墓所に詣でた。此の墓の主は余が最も親しくした先輩の一人で、余が在郷の壯年時代から深交を結び、君が貴族院議員として毎歲上京された時代には、何時もたび／＼往來してゐたのであつた。然るに今既に龍門原上の土となつて幽明境を異にしてゐるので轉た感慨に堪へられない。君は素封の家に生れ、其田畑は縣中第一と稱せられたのであるに、自ら奉ずること薄く人の爲め盡すこと厚く、且つ文學に長じ見識も卓拔で、國に盡すは人を養

ふに若くはないとして資を給して多數の學生を養成したのであつた。晩年に金澤水電事業に深入して災禍を被つたこともあつたが其事業に忠實にして一意國益を念ふの誠心は大に敬服すべきであつた。君が往事を追憶すれば、頭の自ら下るのを覚え一掛して墓畔を辭し、君が舊館を訪ねると未亡人が喜び迎へられるのに逢つた。折ふし當主保雄氏は所用の爲め金澤に行かれた留守であつたが、屢來訪した家として人のみならず物も亦多くは舊知で、愈思出を深からしめた。鄭重な午餐を饗せられ懷舊談に時を移し、漸く二時半發の汽車に投ずることを得た。

此の附近に末森山といふのが名高い。天正年間に奥村永福が佐々成政の大軍を破つた古戦場で、今猶ほ城址が存してゐる。次驛羽咋は本線中の要驛で郡役所もあり國幣大社の氣多神社もあるが、下りても

見ず通過する。こゝから邑知瀉の煙波が眺めに入る。周圍三里だといふが車中から見る景色が恰も東海道の濱名湖を過ぐる時のやうに思へた。聽て右に峨々たる石動山の連脈を仰ぎ左に眉丈赤倉の諸山を望みつゝ、能登縮布の本場である能登部を経て良川徳田の兩驛を過ぐると地勢が漸く展けて、北方に丘陵が低く起伏するのを見受ける。幾もなく濱邊に出て、七尾灣の蒼波や、能登島の翠螺が車窓に迫つて來たと思ふと、やがて七尾驛に著き驛前から乗合自動車によつて和倉へと急いだ。

途中「能登半島」と題する案内書を見ると、左の一節があつた。

七尾南灣は東西三里南北二里連脈丘陵町の左右に迫り、前面能登島を控へ、西方屏風の瀬戸を以て七尾西灣に通じ、更に北方小口の瀬戸により日本海に出づ可く、遠く北海道樺太露領西比利亞或は朝鮮支

那海に行くべし。然れども灣内處々に暗礁あり爲めに大船の航行を阻げ、地形灣狀の好良なるに拘らず其發展遅々として振はざるは素因一に此點にあり。是に於て航路目標として數年前七尾町の經營によりて浮標七箇を設立し以て船舶の出入に便ならしめ、更に縣費を以て大瀬、淺和歌出の三暗礁にアセチリン柱燈浮標を設け、又松ヶ崎に水面上百尺の高燈を、荒神鼻に同五十尺の低燈を設け船路に便ならしめたるよりさしも咫尺を辨ぜざる暗夜と雖尙且安全なる航海をなす事を得るに至る。然ども港灣の修築は尙之を以て足れりとせず、明治四十三年八月より更に縣費を以て航路に最も危險なりと稱せらるゝ森田暗礁の破碎事業に著手しつゝあり。森田暗礁は七尾南灣小口瀬戸の中央に位し、航路より左舷四十六間を距て、其面積二千五百坪、其水面下最淺部を六尺なりと云ふ。元來暗礁破

碎の事たる幾多の費用と歲月とを要し、眇たる縣費を投ずるのみにしては到底近き將來に於て其完成を見る能はず。近く内務省より浚漂船及び小汽船の貸與を仰ぎて益、事業進行を捗りつゝあるは其前途を祝福するに足るべく、聽ては障害物を排し碇繫地を浚漂するに及び自然の一大良港を現出すべきは疑ふ可きにあらず。是れ當に七尾港の發展たるに止らずして延ては北陸に甚大なる利益を與へ、我國の貿易上に及す影響又甚しきものあらんとす(下略)

然り七尾は天然の良港たるに相違ない。但此の暗礁の爲め大船巨舶を入れ得ないのだ。速に此の障害物を取除きたい。文明の今日、灣内暗礁を片づけるぐらゐは何でもあるまい。それとも經費の點に恐をなして居るのか。一段の研究をして伏木港を凌駕する商港としては如何。などと考へてゐる内に和倉に著いて田中旅館に投じた。即ち

余が従兄田中宣譽氏が近年經營する所の旅館である。浴槽の設備は未だ和歌崎館に企及し得ぬが、故舊多くは凋落した今日、従兄一家の真心よりする歓迎の爲に居心地がよく、久方振りに浴した肉親の情は靈泉に浴するよりも温かであつた。

五 輪島見物

翌廿九日早天に起きて見ると、昨夜の雨は名残なく晴れてゐた。若主人の信一氏に同行を促して、海濱を漫步して能登灣の朝景色を観た。此灣は七尾灣とも稱せられ、中央に横はる能登島によつて北灣、西灣、南灣の三つに區分されてゐる。何の事はない、一枚の桑の葉を蠶が食うてきて真中に島と、周圍に輪郭とを食ひ残したやうな趣で、長汀曲浦が出つ入りつゝして日本海岸には稀な變化の多い景色を形成つてゐる。

斯の瀬戸内海に見るやうな夏の朝海を見てから、踵を轉じて圓山公園に上り一周して見た。曾遊の地で其景致は既に北遊隨感錄に記述した所である。數年後の今日見る所と少しの變りもない、依然として人工的の改修を希望させるのみであつた。

七尾から宇出津行の汽船が入港したのは午前九時頃であつた。急いで乗込んだ。此處からの航路は七尾から屏風崎瀬戸を経て和倉中島、穴水等所謂内浦の諸港に寄港し宇出津を終點としてゐるものと、七尾から能登島の東部小口海峽を出て宇出津に直航し、夫から珠洲岬に至るべき沿岸の小木、松波、飯田、正院などに寄航し蛸島を終點としてゐるものとの二つに岐れてゐる。余が乗つたのは前の航路であつた。乗込むと間もなく船は針路を北に取つて動き出した。甲板に立つて眺めると、右に能登島が見え、左りには机島や種島が浮いてゐる。それ

を見送ると瀬嵐長浦の濱が吾れを迎へる。やがて猪島北島など面白い形をした島の近くを船が進んで、三ヶ口海峡に入つた。陸と能登島との距りは僅かに數十間に過ぎないから、兩岸は呼べば應へん勢である。こゝを過ぎ左に青島右に立島中島鱒島などといふ島礁の間を縫ふて北灣の中央に出た。空は麗かに海は清らかで、風靜なる青波の上に浮び、隨所に變化極りなき島山の景色を送迎する趣は、松島も斯くやと想はせるくらゐで、日本海岸としては他に見難い趣である。されば少しも倦怠することなく、七里の海上を約二時間で航りて、新崎鼻を左に迂回すると穴水港に入るのであつた。

穴水港は北灣が深く北に灣入した所で、船舶の出入が便利であるのみか、港内が深いから時に軍艦も來泊するし、又輪島街道と總持寺街道の焦點となつてゐるから鳳至郡中の要津で僻陬に稀な繁華の巷で、人

口三千を算してゐる。港の南端に突出してゐる岬が目立つ、それが乙ヶ崎とて長氏の城址である。天正の昔、上杉謙信が部將轡田等を先陣に攻寄せた時に、城主長連龍が逆襲して大激戦をした古戰場である。

上陸後程なく乗合自動車に乗込んで輪島に向つた。道は次第に上り勾配となつて、やがて河原田川の流れに沿うて進むのであつた。行くに従つて山路は愈、險しくなり、所謂峽谷で溪水が深く流れてゐる、其の鞆々の聲を脚下に聽きつゝ、羊腸たる山路を、うねりくねりつゝ、自動車が上つて行くのである。ふと昨秋徳島から土佐街道の吉野川沿岸を上つて行つた趣が此通りであつたと想起した。斯うして上りつゝ、行くかと思へば、時には谷底へ落込むやうに路が下つて、兩側に峨々たる峻嶺を仰いだりする處もある。變化に富んでゐるだけに案外に飽かない。六里を約二時間で駛つて午後一時に輪島へ著いた。

余が擇んだ旅館は、河原田川橋畔の廣谷旅館であつた。蓋此處の主人は金澤の生れで余が舊宅へも度々來たことを想出したからである。出迎へた家人に案内されて一室に落付き、早速に主人の起居を尋ねて見るに、話が頓珍漢で要領を得ない、だん／＼穿鑿すると、舊知の主人は二十餘年前に既に歿し、其子も亦死して今は孫の時代となつてゐるのであつた。「所經多舊館、大半主人非」といふ古詩を其儘なのに聊か寂寥の思ひをさせたさへあるに、更に相識である當地の有力者永井梅次郎氏に面會せうとしたが此人亦旅行して不在であるといふのに愈淋しさを加へたのであつた。仕方がないから獨り午餐を喫し、一老媪を先導として見物に出かけるのであつた。

一見した所を概括すると、輪島は能登外浦の海岸に位して北西に輪島崎を擁して灣の形はしてゐるが、澗間が廣きに失して風浪が荒いか

ら巨船を繋ぐことは出來ない。併し此町の中央を貫いて海に流れ入る河原田川の河口は帆船の碇繫に差支がないから出船入船が何時も繁盛してゐる。市街は此川によつて兩分され、北が河井町、南が鳳至町と呼ばれ、郡役所もあり人口壹萬に餘るさうである。産物には誰も知る漆器が筆頭で、住民の多くは此業によつて生計を立て、ゐる。此の他に素麵、柚餅子、水産物なども物産となつて居るが多寡の知れたものらしい。

河井町の方を歩行いて見ると、町が賑かで商店も多く町並が整うて見え、漆器の賣店など立派なものも多いが、唯だ賑かな町といふだけで何の風情もなく、僅かに一本松公園と重藏神社とが目をはひくだけである。河一つ渡つて鳳至町へ行つて見ると、町は淋しいが見る所は多い。先づ住吉神社として由緒の古く従つて神域の莊嚴な社殿を一見して、鳳

來山俗にいふ觀音山に登ると、其處が即ち輪島崎で眺望頗る快闊である、眼下に袖ヶ濱が瞰され、遙かに碧水に赭頭の影を投げて散在してゐる數箇の島が望まれる、それが名高い七ツ島なのであつた。尙ほ雲烟模糊の間に袖倉島が長く波上に横はつてゐる筈だが、低い礁だから肉眼には見えない。是は一名沖の離島とも呼ばれ、海上十八里の沖に、一つの大きな島の周圍に大小無數の岩礁が出没して出來上つてゐる珍しい島であるといふことだ。島内には人家が少いが、漁期には輪島あたりの漁夫が假宿して主として鮑漁に従事し名産乾鮑を作るので、警官、教員、町吏、神主なども同行する。さうして秋の涼風が立ち初めて、海荒れの季が近くと、島を引あげて歸つて來る、其時に米一石と鹽一俵を袖倉島の空家の中へ遺して置く、それは漂流民を救ふ爲めぢやといふ。曩に船で見て來た七尾内灣の波靜かに島圓かな眺めも優美であ

るけれども、此の輪島を中心に外洋に面した海濱の荒磯に怒濤が咆哮する豪壯雄大も亦得難き好景であると、低徊霎時の後に山を下つて砂濱に出て、海士町と稱する漁村を過つた。何んでも永祿年間に九州から漂流して來た漁民であると傳へられてゐる。それが今猶ほ西陲の古い風習を墨守して居る。見物に意外の時を費し、宿へ歸つたら既に日暮であつた。

六 舊知尋訪

翌三十日も早起して見ると快晴であるに安心した。朝飯前に宿を出て街衢から海濱まで逍遙したが、昨日の行動を繰返した丈けである。僅かに一夜を泊つた丈けで、真相を把握することは出來ないけれども、總じて輪島は半島に僻在してゐる爲め、稍、社會の進運に後れてゐるや

うである。其代りに都會華侈の惡風に感染せず、昔乍らの質朴さを保ち、人は皆な勤勉勵精して堵に安んじてゐるやうだなど考へ乍ら旅宿に歸つて朝飯を攝り、八時發の乗合自動車で昨日の途を逆に穴水へと歸つて來た。其途中で、端なくも漆器の老舗新田某氏に出會して、輪島漆器に就て有益な話を聞くことを得たのは幸せであつた。其話によると、製品は飲食器を主として居り、種類は朱漆器と黒漆器とあつて、殊に沈金物を特色としてゐる。何れも堅牢耐久の點は他の漆器に負けを取らないけれども、技巧には尙ほ一段の工夫を要する、無地物は多少の進歩があるけれども、一般のものは昔乍らの素朴なもので社會の好尚に副はない嫌もある。近年これが改良に苦心中であるとの事であつた。余は記念として無地蠟色塗の掛額一面を註文して置いた。九時半に豫定のとほり穴水に歸著。直ちに自動車を乗換て總持寺

街道を取つた。此の街道は、丘陵の起伏が多く自動車も時としてよたよたの有様である。中にも梨樹坂を登らうとした時などは、車の負荷が重くて動かない、已むなく乗客一同が下車して、力を合せて車の後押をやつて辛うじて押上げたといふ珍事さへも生じた。確かに一大珍事である。余は生來車の後押を任命されたのは此年になるが、此日が初めてである。斯る災難はあつたが兎も角も總持寺門前へ來た。併し明日參詣するからとて失敬して通り越え、諸岡村字道下迄走らせ、此處に下車して酒井政治氏の家に投じた。

酒井氏は余には忘れ得ぬ一人である。想へば既に十餘年前である。氏は吾社に勤務せられ、能筆である爲め特に余の祕書を勤められた。のみならず漢學の造詣深く堅實な性格である所から特に余の隣家に請じ、幼ない長次男を託して教掖の勞を煩したのであつた。然るに氏

は在職七八年に及び老境に入るの事由で、辭任歸郷し令息の許に閑臥せられたので、余及び余の家人も残り惜く思つたのであつた。併し其後も音信は絶えず、屢余に來遊を促された。乃ち只今訪問したわけなのである。

余は人を訪ねる時は、大抵は案内をして行くのだが、今日は敢て謙信の兵法を真似たわけではないが、突如無案内で闖入したのである。此疾風迅雷式の珍客には氏並に令室も聊か吃驚の眼をほちつかせられたのであつたが、余をそれと認むるや歡び迎へられた。余も十數年振りに氏が健在の顔を見ることを得て喜びに堪へず、また家門の繁榮を見て祝福せざるを得ないのであつた。氏の居宅は高丘の上約二萬坪もあらうと思はれる蔚蒼たる森林に包まれて居然として横はり、どう見ても城砦の觀望である。而かも昨年の改築として木香が猶ほ鼻をつ

いて馥つてゐる。元來氏は數代續いた素封家であるのに令息政吉氏は金澤醫專出身で近郷に稀匹の醫師である所から、家運彌榮に榮えつつあるのである。其處で氏は今此の新築城砦の樂隱居として悠々自適、狩獵などをして運動して居るのであるから、矍鑠老いて益壯なるも當然である。十數年來毎冬必ず雉一番を贈られるのも氏が道樂の獲物であると知つては其境遇が寧ろ健羨の至りに堪へぬと言ひたかつた。談じ且つ喫して午餐を了ると川狩に案内せうとて都人たる余にも草鞋を穿かせた。家を出て數町を歩んだと思ふと早や川のほとりへ來た。八ヶ川といふのださうな。氏は早速に浸々と川瀬を涉るの

で余も續いて草鞋の足を水に入れた。さうして鮎掬ひが初められたが、驚いたのは無數の小魚が眼前に群がつて、掬ふ毎に數十尾が得られることであつた。斯うして筈は忽ち充滿された。此様な遊びを吾家

の子供等にさせたら如何ばかり喜ぶことであらう、都會附近に斯様に暢氣な遊漁場のないのを物足らず思ふのであつた。鱸だけでは面白くないとあつて、更に川を上下し、深い淵に投網を試みて、巨鱗をもものせんとしたが、それは鱸のやうに單純にゆかないで、失敗に終つた。一時間許りののちに一應家へ歸つて獲物の始末をして、再び家を出て川の下流潮入の處へ行つて、投網のやり直しをした。今度は鱒や鮒の中魚が多く捕れて都よりの珍客を大に娛ませた。此川口は湘南茅ヶ崎の柳島に似た地形であるが、柳島あたりに網するのと違ひ、斯く獲物が多いのは、漁人の寡きためであらう。魚族の發生成長する暇もないやうに濫獲する太平洋海濱は、今に魚類が盡きはせぬかと思ふにつけても、此邊の文明に遠いことが却つて生活に幸福であることを感ぜしめるのであつた。網打の序に海岸の砂濱を漫歩した。磯近く突出した岩

石に怒濤の碎けて夕陽に映ずる趣は大磯の景色も其儘で、一幅清新な油繪を見せてゐた。薄暮宿に歸ると若主人夫婦も出て迎へられて四方山の談に其の懇情を示されるのであつた。やがて心をこめた晚餐を饗せられたが、膳頭には先刻漁獲した鱸汁もあり、總て新鮮美味な爲め酒味大に加はつたのみならず、老媪は昔に渝らぬ溫和さで、吾家の人の消息など懇ろに尋ねられる昔語りに興が添うて談笑に思はず夜を更かすのであつた。

七 總持寺參詣

酒井氏の城郭で一夜を明すと早や七月に移つて其第一日であつた。又も快晴の空が續くのに有難いと思ふ。總持寺一見に及ばうと酒井氏と相携へて家を出たのは午前八時頃であつた。道は昨日鱸を掬ふ

た八ヶ川に沿うて行く。對岸は山に續いてゐるが、其山は高くはないけれども、獅子鼻、象鼻など名ける奇岩怪石が處々に散在して相當に見られる景色をなして居る。半里許を歩むで櫛比村字門前に達した。即ち總持寺入口である。

總持寺が越前永平寺と並びて曹洞宗の二大本山であることは誰も知つてゐるところだ。元亨年間に僧紹瑾が開創したもので、寺號は後醍醐天皇の賜はつたといふ由緒を所持して居る。従つて堂塔伽藍も規模宏大なもので、遠國にまで鳴り響いてゐたものだが、先年祝融の災に逢ひ堂宇殆ど全く烏有に歸したのは惜しいことである。其處で再建に就き坊主頭に鉢卷をして議論を闘はせた結果、遂に東京に近い鶴見に本寺を移して此處は支坊としてしまった。復昔日の壯觀を止めないが其面影だけは残つて、舊の儘の樓門と經堂とは更なり改築の殿

堂も宏壯と言ふ側である。監院が酒井氏と相識である所から、寺内限なく巡觀の便を得て、後醍醐帝の宸翰や菅公の金剛經など珍らしい寶物なども拜見した。寺域は五千四百餘坪松杉鬱蔚たる山を負ひ、庭園の樹木も古蒼で、遠がに古刹の面影に懐かしめるのである。

寺を出て歸路に就くと、酒井氏は遙かなる家を指し、あれこそ故小間肅氏の邸宅であると教へられた。小間氏は縣會議員となり更らに衆議院議員に當選すること數回、學識もあり議論も立ち一時世に名を知られた國士で、余も曾て相識り數回激論した事もあつた。然るに性質が剛愎で徳望を缺いた爲め末路甚だ振はずして終つた。今此の舊邸のほとりを過ぎつて往事を追懷し轉た一掬同情の涙を禁ぜないのであつた。酒井氏の談によれば、此の門前に生野臨犀といふ儒者が聘せられて郷塾を開いてゐた、もと長野の人で安積良齋の高弟であつたか

ら、造詣深く識見も卓拔であつた。酒井、小間の兩氏ともに其門より出たのであるといふ。此地方に文學の素養ある人が多いのは、これある哉と首肯された。雜談に興が乗り、知らぬ間に酒井氏の家に著いた。

午餐後小憩して又見物に出かけた。今度は前とは反對の方向を取つて、海岸に沿うて歩むこと十數町で黒島へ著いた。漁業を主としてゐる小市街で、船持もあり民産が裕である。此途中で酒井氏の紹介で諸岡村に宮丸喜作氏を訪ひ蠶種製造をも一見した、其宮丸氏が前日梨木坂自動車後押隊の一人であつたのは奇遇であつた。黒島から尙ほ先きへ外浦街道を進めば羽咋郡の境に近く、鬼神大王波平行安が劔を打つたといふ口碑で名高い劔地に達する、それは相識の中橋和之翁の産地で翁の寄附に係る礪石文庫があつて文學が盛んな地である。其處から尙も進むと富來、福浦などいふ景勝の地を経て高濱に入り、更に

羽咋に達するので、見るに足る景色に富んで居る。曾て親友奥田松坡君が逆に羽咋から踏出して輪島へ出で、其壯觀を激賞してゐたから、余も一度は此の道を踏破せうと期して居た。今回は是非年來の期望を達せうと思つて、松坡君の紀行を途中で展讀して見ると可なり骨が折れる旅らしいのみならず今酒井氏其他の人から聞いても却々の難路で、俾も通ぜず草鞋で徒歩を要する箇所も多いとの事であるから、敵に後ろを見せるやうな残念さを忍んで、斷念をして、遠く望んで想像に止め歸路に就くことゝした。

歸路は同じ道も興なしと磯傳ひをした。其邊は漁船や曳網などの漁具が濱一面に散らかつて居り、魚類を日に晒して乾製してゐる所もあり、如何にも漁業に生きてゐる磯村であつた。傳ひくゝ來ると、岸近く奇しき形をした岩石が突出して波と戦つて居るのが數限りもなく

出沒してゐるので飽かぬ眺めをなして居る。歸宿後、入念の晚餐に魚介の新鮮なのを御世辭のないところで賞味し、盃を含みつゝ、床上を一瞥すると井上圓了博士の絶句が掲げられてあつた。

都門狹不適窮身。去向北溟將盡濱。山遠水長天地闊。風光好養我精神。蓋し主人が昨今の心境を代言してゐるものであらう。

八 小舞子の省老

翌二日も亦快晴であつた。午前八時半に酒井氏の許を辭して、黒島から來た自動車に乗つて出發した。歸路には車の跡押を命ぜられる災難にも出逢はず、十時無事穴水に著いた。七尾行の汽船今や纜を解かうとしてゐるのに辛して乗移り出帆した。船中は乗合客もあつて賑かである。中によく語る者があつて、余が探勝の客であると知つて、

奥能を探るには内浦街道即ち穴水から宇津出を経て小木に寄航し、小松島の名を得た九十九灣の風景を賞し、尙ほ飯田・正院等諸々の絶景を見て珠洲岬の絶端まできはめねば未だ能州の景を見たものとは言へないなどと慫慂するのであつたが、余は九十九灣の小松島は先年遊んだこともあるので、其外までも残る隈なく漁らんことは、却つて旅行冥利の盡きることゝも思つて、海上遙かに其れと覺しき方を望見して想像の天地に遊ぶだけで満足をしたのであつた。

此日も海上は風波あがらず、往きに見たばかりの灣内の景色も、新しい趣を以て吾れを送迎して呉れるので、少しも船路に倦むことなく午前十一時半七尾港の矢田新棧橋に著いた。連絡の汽車に投じて金澤へと走せた。車中で圖らずも舊識の永江久常氏に邂逅して、四十年前の昔を語りつゝ、時の移るのを覺えなかつた。此の途中には羽咋驛

附近に國幣大社氣多神社があり、瀧浦の勝もある、殊に瀧浦では曾て故岡野氏等と舟を泛べたことがある、其時に氏が奇岩突出祠林茂、灣裏潮温風浪無、蜃土浮沈君勿怪、海底又是一勝區の七絶を吟じたのは今猶ほ耳底に残つてゐるので、下車して往事を追懐せんかとも思つたが時間の都合で見合せることにした。又た歸途にと約した田邊又五郎氏の石灰事業視察も、今度は主人側に事故が生じたので、他日を期して通過し、三時頃金澤の旅宿に歸著した。此夜眞館貞造氏の來訪を受け、共に楽しい晚餐に就いた。

翌三日午前八時頃舎弟宮武二郎が來訪したので、携へて旅宿を出て養母を省す可く小舞子に向つた。野町で此頃市街軌道會社に合併された松任線の電車に乗つた。合併後車輛も新らしく軌道も改修されたので乗心地は先年の比ではない。松任驛に著いたが汽車の出るに

は未だ時間があるので、其間にと驛前の城址へ行つて見た。天正年間松任範光が初めて築いた所で、後に上杉謙信の爲め攻落され、元和偃武後には徳川則秀、前田利長、丹羽長重などの居城であつた處だ。今は亭亭たる松林が嵐にむせんで昔を語り顔であるのに、其の周圍の濁つた沼池が古英雄の恨を祕めて居るやうであつた。少時低徊してゐたが未だ時間があるので、其隣の物産陳列所を覗いて見た。石川郡の中心で郡役所、農學校、農事試験場などあるだけに、物産も豊富のやうである。漸く來た汽車に乗つて手取川の鐵橋を渡つたと思ふと直ぐ小舞子驛であつた。此の驛は水泳客の爲めに去る一日から開始されたのであるが、夏猶ほ淺く雨さへ催したので殆ど乗降客がない。淋しい松原を三町許り徒歩して宮家の別荘へ入つた。茲に靜かに老を養ふ母親を撫恤し、病弟を慰めなどし、誘うて海濱を漫步し、一旗亭に入つて午餐

を共にし、久方振りに親子水入らず温情に浴することを得た。此のあたり白沙青松の趣はすべて播磨の舞子濱そのまゝである。未だ水浴に賑はない静かな天地に、薰風に袂を吹かして徜徉するなど、閑寂な半日を過して心神清淨頃來の疲勞も爲めに癒せられるのであつた。

二時頃、歸路に就いた頃から雨が烈しくなつた。松任で電車に乗換へ金澤に入ると雨が益降りしきるので腕車により歸宿した。夕刻は金子重太郎、西永公平二氏の來訪があり晚餐を共にし談笑に時を移し、午後十一時五十四分發東行の汽車に搭じた。車中石川縣土木課長宮島三郎氏の郷里新潟へ歸省するのと隣席して、暫く談話を交へたが其内睡魔に降伏してしまつた。

九 新潟一瞥

寐た間に汽車は駛つて、眼が覺めると直江津へ著いてゐる。それは四日の午前六時だ。今回の行は新潟を経て佐渡ヶ島の歌枕を探るのが主たる目的であつたが、遠がに日和男を以て自任してゐる余も昨夜來の豪雨には聊か辟易して、場合によらば東京へ直ちに歸つてしまはうと、兎に角に直江津迄の切符を買つて、先は其日の天氣次第に信せて置いたのであつたが、幸に雨は車中に霽れてしまつたし、隣席の宮島氏も切に佐渡行を勧められるので、遂に車上居据りと決意し、汽車の北行するに任せたのであつた。

直江津から汽車は海岸に沿うて行く。右を見ても左りを見ても蒼波縹渺であるといへば、海中の堤上を行くのかと怪む人もあらうが、左

なるは海の波で右なるは青田の淺緑の波なのである。此の稻波こそは北越平野の廣さを想はせるもので眼界何處迄も其波が續いてゐるから驚く。其平野が盡きて山近くなつたと思ふと忽ち隧道へ入る、出ると右は山左は海、暗明交錯して闇になる間は苦しいが、苦あれば樂ありの諺通りに、出た時は雪とも擬ふ飛沫が荒磯岩に咆哮してゐる壯觀が何んとも言へない。斯うして汽車は柏崎に入るのであつた。柏崎は長岡に次ぐ北越の大都邑で、戊辰の際に戰場となつて一時荒廢したけれども、附近に油井發見以來は次第に裝を改めて、今では日本石油寶田石油の二大會社を初めとし數多の製油工場が建てられ殷賑を極めて居る。此處から線路は次第に海を遠ざかつて、北條塚山來迎寺其他數驛を経て長岡に著くのである。此地は國中で新潟に亞ぐ都會で、戊辰役の際には戰巷となり、河合繼之助が薩長軍を苦めて壯烈な戰爭を

したので有名であるが、今は同じく石油產出地となつてゐる。茲までは先年親戚の工學博士故伊東榮三郎氏と同行して石油業を視察し、その東山に林立せる無數の井櫓を見て鑛區の富贍なるに驚き、成程石油業は幸に掘當てれば暴富を成すも、見當が外れたら己が掘つた井の奈落の底へ沈むもので、大資本家は從事すべく決して小資本家の手を出さず可きものでない」と決論をした所である。石油業も其頃から見ると昨今は面目を改めて次第に盛大に赴いた事だらう。日石寶石二會社の重役中には知人もあるから歸路には一見せんかなど考へつゝ、此處を過ぎ二小驛を経て三條に著く、是れ亦戊辰の戰場で殊に驛外高安寺坂は激戰地であつたが、今は柏崎に次ぐ都邑をなし、信濃川に沿ふ沃野の中心である。西方に彌彥山が聳え、當國屈指の彌彥神社を頂に鎮し、一見の價值があると聞いてゐるが下車する勇氣はなかつた。次に

加茂一の木戸羽生田等を過ぎ、近來油業勃興して頓に繁盛をしたと聞いてゐる新津を経て、午前十時四十分新潟驛に入つた。直ちに俤で信濃川の萬代橋にさしかつた。水流廣闊で洋々滔々として居る上に長橋が架つてゐるので、景色が素敵によい。鱗々と車が橋上を走るのが馬鹿に長い。尋ねて見たら四百三十間だといふから長い筈だ。渡り終つて礎町の篠田旅館に投じた。

汽車で揺られた空腹を午餐で充たすと高等學校長の八田三喜氏が來訪された。先刻電話をかけたものゝ、公務もあるから如何と思つたのに、早速の來訪に難有く感じた。即ち氏を東道の主人にたのみ、俤を連ねて先づ本町通りの商舖櫛比する中心をば、お上りさんよろしくの態で見て過ぎ日和山と稱する砂丘へ登つた。信濃川が信州の山奥から長い年月を費して持運んで來た砂の堆積であるらしい、近くに天

候を豫見して出入船舶を監視する名物の一つなる水戸教がある。其傍に立つて見ると、いかにも船を視るのによろしく、全市を脚底に見下ろして、信濃河口の出船入船から遠くは佐渡島の青螺を波上に望み得る、さうして一方には彌彦山の雄姿を仰ぐことも出來て、亦得難き絶景であつた。丘を下り附船町から燈臺を望見して入船町の新潟鐵工所に入つて造船工場を一見に及び、其處の岸から石油發動船に乗つて對岸に向つた。船に乗つて見ると今更に河の大きく深いのが感ぜられる。隅田川や淀川の比ではない、先づ日本には見受けぬ大河口である。「新潟は八千八水の大港」といふ俚諺は決して人を欺かぬ。新潟港をなす唯一の要素である信濃川は其源を信濃の溪間に發して此地に注ぐまでに無數の大小流を合す所から八千八水と誇張したのであるが、實測したら、それ以上あるかも知れない、河幅廣きは十町に垂んとし、水深

二十五尺の所さへあるといふのだもの。

對岸に著いて造機部工場を一覽した。該所は明治廿八年の創立で資本金今は五百萬圓、當市第一の大工場である。此地は總じて鑄鐵工業發達し殊に造船機關器具等の製作に力を注いでゐると云ふ。再び船によつて入船町通へ歸り其處から俾で材木商や廻船問屋の多い大川町通を過ぎ、本町を横切つて寺院の多い西堀通へ出て、新潟第一と稱する伊太利軒といふ洋食店に入つて小憩をした。此處で偶然にも同郷の知人松井喜三郎氏(高等學校教頭)に邂逅した。雜談少時の後に三たび俾上の人となつて官衙の多い東仲通を経て市の南端白山公園に入つた。是は當地第一の遊覽地だとの觸込であつた。成程面積は八千八百坪と註せられて廣く、信濃河岸に沿うてゐるので展望が開豁であり、且つ池沼もあり丘陵も起伏し、老松の間に梅櫻を交植し、處々に見

苦しくない碑石も立つてゐれば茶店も目障りにならぬ所に散在してゐて、泉石の布置すべて宜しきを得た瀟灑な園である。それから醫學專門學校、師範學校などの存在する學校町に出て八田氏が督せる高等學校に入つた。今は新築中で、盛んに斧鑿の音を亂してゐる。其處の運動場に立つて休息をした。眼下に海水浴場があり、日本海の怒濤が裾を洗つて、遙かに佐渡の孤島さへ眺めに入るのだ。斯んな景勝の地に教育されて人物が出ねば其處に何等かの缺陷がなければならぬなと思ひ乍ら校を辭し、南濱通の八田氏の邸に入り、令聞初め其家人に面會し、本日處々案内の勞を深謝した。

新潟は米と其の逆音の女子で持つと言はれてゐるが、此の戸數一萬八千人口約十萬の大都市は確かに其の二つで支持されてゐるのらしい。信濃川の水を導いて溝渠を市内縦横に通じて渠毎に橋を架けた

のが昔は七十四橋と云つて自慢の一つであつたものが今は二百橋に増加してゐる。其橋の下を流れる水は即ち米を運び女の顔を清める水だ。國中の産米が悉く茲に集中して、帆船で信濃河口から諸國へ吐き出されるのが經濟の主力である。既に水が饒かたで船が著く、茲に女子道の發達するのは當然である。日光を見ずに結構を語るなどいふならば、女子を見ずに新潟を話すなど言はねばならぬとの事である。折角來て水を眺め船の多いのを見乍ら女子を見逃すは寶の山に入り乍らの感もあるけれども、さりとして高等教育に従事する先生に案内させるのは少々人柄を辨へぬ嫌はあるが、恐れ乍ら伺を立て、見たら、仔細なからうとの事なので、薄暮から相携へて、紅燈絃歌の夜景を見る可く古町通へ來て見ると、高樓軒を聯ね絃聲湧くが如く實にも聞しに勝る銷金窩で坐ろに遊心を唆るのであつた。物もためしと言ふから、其

中で最も著名な鍋茶屋に登つて見た。近年市中の大火後に新築したとかで、東京風に白木で瀟洒に造られてゐる。大廣間に請ぜられて座に就くと配膳になる、間もなく天津乙女の一隊が天降る、喋々喃々、甘つたるいものだ。都よりの客人とあつて様々な藝當を演じて見せた。鄙の手振りも亦さすがで覺えず興を催すのであつた。中にも珍奇なのは盆踊やお袈裟踊である。三つ割と覺しき酒樽を座敷へ持出して、槌形の兩撥でトントコノと鏡と胴とをたたく、それに連れて絃を合せる、やゝ鄭聲の感もあるが如何にも賑かな囃し方だ。囃方が賑かたから自然と踊りも活潑である。圓陣を作つて唄ひ且つ舞ふ花の姿は、旅愁も忘れさせでは置かない。名所盡しとして唄ふを聞けば

新潟名所は様々御座る。四方に見渡す日和山。沖の洲崎に出船入船、下町女郎衆に島女郎衆、二三小意氣で五六全盛、阪内小路の賑かさ、

寺町通ればコレモシ馬鹿らし、あんにやそん。寄りなれやア
これを先刻から御覽になつた八田氏は、新潟の繁盛は港の爲めに非ず
美人の爲め」と云ふは誣言にあらずとて、教育家らしい嘆息を洩らすの
で、興は未だ盡きないけれども長居は迷惑と更けぬ間に引上ぐ、歸宿し
て明旦佐渡へ渡る旅装を整へ寢に就いた。

新潟盆歌

樽をた、けば佐渡まで響く夏は寄居の濱踊
碇おろせば早や氣が勇む花の新潟に樽の音
新潟白山花時よりも盆の花笠なほ見事
鯛引く網見乍ら一寸主を寄居の濱の茶屋
櫻も植ませう梅も咲かそ花の新潟見にござれ
私の心と新潟の濱は外に木はない松ばかり

新潟戀しや白山様よ松が見えますほのぐくと

十 佐渡ヶ島
上

五日はつとめて早起をした。今日は四十九里波の上にいるといふ
佐渡ヶ島へ渡るのに其汽船の出帆は午前六時といふ觸れであつたか
らだ。幸に空は晴れて居るので俵を命じ宿を出て下川前通の越佐汽
船會社へ行つて、其處に待つて居る度津丸といふのに乗込んだ。僅か
に百噸積みの小蒸汽で「行かれよ」と唄はれてゐる孤島へ渡るには心
細いやうだが仔細ないものと見える。何んでも十年前迄は四五十噸
の荷物本位の船しか無かつたのぢやといふから、吾等は未だ幸福とせ
ねばならぬ。船は待つ間程なく出帆し、流れに従せて河口へ下るので
あつた。此の信濃川は帝國要港の一に數へられる新潟港を成す要素

であるが併し上流が遠いだけに推流して来る土砂の分量が並一通りではない。其土砂の中を流水の力で僅かに一條の水路を通じて居るが、水底が浅く且つ河水の増減と風波の強弱に従つて其位置深淺が變遷すること決して昨日の淵は今日の瀬となるてふ飛鳥川にも負けない。否な時とすると河口一帶に淺瀬となつて港口が塞がれ、船舶の通ぜぬことすらあるのだから當局並に住民も夙に築港の必要を唱へ既に二十餘年前から河身分水工事並に河口流末工事に著手して近くに其工を竣へる筈だといふ。成る程余が出帆せうといふ今も港口一帶が濁流の爲めに赭色に變じてゐるのを見るのであつた。

船が次第に港口に近づくとつれ浪が益荒れて來て船體の動搖が強くなつて來る。これでは「來いと言たとて行かれよか」と唄はねばなるまい、此の港口でさへ此の勢では愈、外洋へ出たら木の葉のやうに翻弄

されるのであるまいかと、稍、懼れをなしてゐたのであつたが、それは取越苦勞で、此の河口を乗切つて漫々たる外洋へ出ると却つて波が靜かになり、北の海としては思ひもよらぬほど、油を流したやうな穩かさであるのに驚かされた。川流の注ぐ勢と海潮の寄する力とが互ひに闘争するにしても、斯程まで荒れるとは此の河口に泛ばぬ人の何人も想像し得ない所であらうと思はれた。

波が平らになつたのに安心をして甲板へ出て見ると、彌彦角田の峻嶺は、おさらばと吾を見送り顔に聳えて居り、其の下の新瀉も糢糊として次第に遠ざかつて行く、眼を移せば此方には佐渡の青螺がだん／＼近くなつて麗はしい眉をあげて、笑つて吾を迎へるやうに思はれる、斯んな景色に茫然見とれてゐる内に、船は尻風に送られ島近き處まで走つて、燈臺の立つ岬を認めるので、何處かと問ふと、それが早や島の北端

鷺崎の岬で、やがて水津に寄港し夷灣に入つて直ちに兩津港の棧橋に著いた。時計を見ると午前十時で海路三十四哩を四時間に走つたのである。

兩津港は夷と湊との兩町を併せた名であるが、單に夷港でも通つて居る。幕府時代までは一漁村に過ぎなかつたが、慶應三年新潟開港と同時に、日本海岸に於ける要港に躍進したのである。蓋新潟行の貨客が風浪の高い日には此港に寄港上陸して日和待をせねばならぬので、自ら新潟港の一部と看做されたのである。それも其筈で、背後には此の航路に最も忌む所の北西風を遮ぎる山を負ひ、前の海は廣くて深く、優に千噸以上の巨船數十隻を容るゝに足るのである。それに大正七年から港灣の修築に著手して目下盛んに工事中であるから、それが竣成した曉には一層の良港となり航海者に便することであらう。

町を見物する間もなく乗合自動車が出發するといふので、之に投じて相川へと志した。町を開放れると直ぐ海と反對の側に廣い靜かな水が見える。それが有名な加茂湖とて周圍凡そ五里、國中第一の佳景と稱せられてゐる水であつた。海に近く斯様な大湖のあるのは、先年見て來た山陰の宍道湖と此處ぐらゐなものであらう。而かも此處は島に在るだけに興味が深い、雅人が八景を數へてゐるといふのも、さもある可き事であらう。併し下車して低徊するだけの勇氣も出ず、その儘に車の馳するに任せた。展開した平野を横斷してゐる道路は、さして廣いこともないが修築が行届いて、平坦砥の如く、稻吹く風の彼方に山骨を認める外に、特に目を引く景色もない。併し凹凸の都大路とは違ひ車の乗心地は寧ろよいので、四里の道を快よく走つて十一時半に河原田に著いて、江戸屋旅館に投じて午餐をした、めた。

餐後は順徳天皇の御陵に敬意を表さうと俤を命じて相川街道とは反對の眞野街道へと外れた。此の街道は右に越の松原や雪の高濱などを眺めて行く濱道であるが、先程から降り出した雨が次第に烈しさを加へるので少からず行惱んでゐる中に新町街へと著いた。此町は眞野灣に洩み海運の便があるので國內要津の一つに數へられて居る。この入江を眞野入江と稱し、眺望のよい勝區であるばかりでなく、思ひきや雲の上をば餘所に見て眞野の入江に朽果てんとはといふ有名な順徳帝の御製があるので此處へ來ぬ人にも普く知られて居る處である。又「いささらは磯うつ波に言問はん沖の方には何事かある」と同じ帝が詠みたまうて、後鳥羽上皇の隱岐に遷幸さるゝを悲しまれたと傳へる戀ヶ浦も其近くの豊田といふ地にあつて、今は此の御製を刻んだ記念碑が海岸の岩の上に建つてゐる。此の碑を讀み、天皇の御事を懷

ふと覺えず暗涙を催さるゝのであつた。此處から程なく同帝を祀る眞野宮の神社へ著いたが折しも改築中であつた。茲で俤を棄て御陵に詣づ可く阪路に差かゝると、路傍に老梅の根に石を抱いてゐるのがあつた、即ち石抱梅として同じ帝が遺愛の樹であるといふ。此の樹から五町許も歩んだ頃に漸く御陵に達した。域内は幽閑森嚴で、枝を交へてゐる老松が折ふし降る雨の雫を宿して、さながら古き帝の御事を想ひ浮べて涙をしぼるのかとも思はれるのであつた。

御陵を拜し終つて道を阿佛線に取つた。雨勢彌、急に道路彌、險で頗る車夫を苦めたのは氣の毒であつたが、一里許を勉強して妙宣寺即ち俗にいふ阿佛坊に著いた。松杉蒼鬱たる處に寂びた山門が見え、五重の寶塔が高く木立を抜いて居る、雨の中とて參詣人も稀に、如何にも閑寂な趣であつた。此處こそ弘安元年遠藤左衛門尉爲盛入道日得上人

の開基で古來北陸道七ヶ國法華宗門の棟梁として尊崇せられる所である。爲盛は順徳上皇に奉仕して居たが、上皇の崩後薙髮して阿佛坊と號し其妻も上皇の侍女右衛門佐に仕へたが剃髮して千日尼と號し、夫婦心を一にして配流されて來た日蓮上人の保護に心血を注ぎ、其身の咎を蒙り住所を逐はれ家財を奪はれるのも恐れなかつた事や、其子の盛綱も父母と同じく上人に歸依して日滿と號し、其居宅を其儘に寺にしたことなど、すべて日蓮記中に多くの頁を費してゐるので人の知れる所である。日滿の後に雜田の城主本間泰昌が之に歸依して寺を今在る所に改築し田園を寄附して今日の盛を見るに至つたので、寺域は凡そ四千餘坪、本堂や五重塔は文政年中に祝融の災に罹つて再建されたものだといふ。此日得夫妻親子の問題よりも茲に見逃すことの出來ないのは樓門の側に在る日野中納言資朝卿の墓と、境外に在る阿

新の隱松とである。資朝卿が後醍醐帝中興の議に參し事敗れて北條氏の爲めに此の島に流謫されたことは史實に明かである。卿は渡島後此寺に起居し、佛道に入り看經唱名に餘念なかつたのであるに、北條氏が之を忌むこと深く、遂に斬に處したので、從者が遺骸を茲に葬つたのであると傳へられて居る。これよりも尙ほ一層の悲劇は、阿新の隱松で、卿の一子阿新丸の甫めて十三歳なるが、父を慕うて遙々此島へ尋ね來て夜間執刀者本間三郎の家に忍入り、父の仇を報じ雜田城を脱れ、此の大樹の蔭に隠れ追兵を避けたといふ悲壯な一齣は太平記にも讀まれ、また謠曲檀風にも作られ、聞く人をして袖をしぼらせることである。今目前に其の墳を見、其松を望みては感慨の懷を深うせざるを得ない。斯る清淨の境に兩宿りして少く霽れた其間にと傳を早めて河原田に戻り、自動車の來るのを待ち夜に入り出發して、相川に著き高田

屋旅館に投宿したのは夜九時頃であつた。

中

登くれば六日。又も日和男の快晴。早起して市街を一巡した。曾ては相川縣廳の所在地で、又佐渡支廳のあつた地として今でも國中第一の都邑とされてゐるだけ、町は思ひの外に賑かによく整つてゐた。併し平坦なのは海岸だけで、郡役所や區裁判所などは丘の上にあつて、山手と下町とで成立つてゐる、戸數二千人口壹萬二千に過ぎぬけれど威張つても差支ない。海濱の眺望は極めて好く南方に突出してゐる春日崎と北方の富崎とで中に相川灣を成してゐるが、併し西北が開け放しだから港灣としての價値はない。船の出入が便でないのに此町が繁盛するのは古來から鑛山が開けてゐるからである。其鑛山は明治廿九年に宮内省から三菱へ拂下げになつて、實際下賜された七萬圓

を町の基本財産としてゐるのだから、町の整つてゐる理由も讀めた。朝食後は名物として俗語にまで唄はれる佐渡金山の見物に出かけた。其所謂佐渡金山は、相川町の東北、北澤川の溪間にあるのだ。謂はれ因縁は頗る古く不識庵上杉謙信が採掘して軍用金にしたといふのから始まつて居る。併し鑛山として記録す可きは慶長六年からで、後に徳川幕府の寶庫となり、佐渡奉行を置き、重罪囚を送り坑夫に使役して採掘を續けてゐたのである。それが維新後は帝室の御所有に歸し御料局の經營となつたけれども、種々の事情の下に明治廿九年三菱合資會社へ拂下げられ、現に其手で經營をしてゐるのである。現今採掘面積は約二百萬坪で、鑛脈は金分の多い青盤脈と銀分の多い大立脈と、銀銅に富む大切脈との三條あつて高任道遊、大立、大切の四大坑に分れて居る。深度は地表より千貳百五十尺、坑道の延長約十里に亙る。排

水は元祿八年に竣成した疏水道を経て相川の海濱に注ぎ全長一萬一千尺と註せられる。疏水道は電氣唧筒で水揚をなし、點灯はアセチリン燈を使用してゐる。選鑛所は二ヶ所に設け、坑内から搬出された粗鑛を嚙鑛器で破碎して塊鑛と粉鑛とに分類をして、塊鑛の方は女工の手で上下の二種に選別し、粉鑛は總て下鑛として取扱はれる。製練方は乾濕兩式の併用で、上鑛は直ちに溶解して地金とするが、下鑛は搗鑛器で粉碎し、汞化作用によつて金銀を水銀と共に「アマルガム」として抽出し、又た青化法によつて之を捕收する。分析所は普通分析の外に「アマルガム」の蒸溜を行ひ、金銀塊を作るのである。大間海岸倉庫から高任坑外まで六千四百三十二尺の間に、複線式鐵索を架設して鑛石や石炭の運搬をしてゐる。原動力は悉く電力で、晝夜運轉をとめないのだが、鑛夫は隔日交代で作業してゐるさうである。要するに千尺の地下

から採掘した鑛物を僅かに數分間で坑口に捲上げ、直に之を搗鑛場に送つて打ち碎くので、其の槌の音は萬雷の一時に轟くが如くで、凄まじい勢ひである。打碎かれた碎片は工女により巧みに選別けられ、鑛鑪に上せて金塊としたり又は他の方法で製鍊せられるまで其間の作業順序は何人でも一見せば略理解し得られるのである。余は某氏の紹介で特別に案内され、一々巡覽し、坑内にまで深入して見て大に益を得たのであつた。

鑛山の見物に半日を費し、宿へ歸ると早や午餐であつた。餐後は匆乗合自動車によつて河原田へと引かへした。途中に澤根町に一寸停車した。此處は鶴子銀山の盛んであつた頃は相川にも譲らぬ殷賑さであつたさうだが、今は廢坑となつた爲め左程迄ではないけれども、北西を防いだ地形にある港のこととて、商港として船舶の出入が繁く、

相當の賑さを見せてゐた。車上僅かに一時間、午後二時半早くも河原田町へ著いた。此處に自動車と別れ、人車を僦うて道を左に山嶺に向つて進むと、半里許で二宮村といふのに入る、其處の市ノ澤にある一ノ谷妙照寺に詣でた。物古りた木立に挟まれた道を過ぎて溪に架せる橋を渡ると山門に達した。日蓮配居の地で、彼は此處で觀心本尊抄を著したと傳へられ、當國法華靈場四ヶ寺の一とされてゐるだけ、莊嚴な伽藍である。寺寶には日蓮の書いた大曼陀羅が有名であるといふが、拜見もせずに直ちに辭して山門を出て程近き御松山實相寺を一見した、此處も前の寺と一緒に四ヶ寺の一つで日蓮が妙照寺の配居は谷底で朝日が拜めないため毎朝此處迄出かけて朝日を拜した所だといふ由縁があり、其處に日蓮が袈裟を掛けたと傳へられる松があり、俗に此地を「お松」と呼んでゐる。妙照寺と異り石階を高く疊めた高丘の上に

一伽藍が建てられて、四面綠樹につままれた靈境であつた。此外に塚原根本寺を始とし、日蓮の遺蹟として存するもの、此の狭い島中に十數ヶ所もあるといふことだが、さのみはと此處で日蓮關係のお寺見物を打切ることにした。彼れ日蓮は配流の身でありながら、行く所として信仰者を作らでは止まない。武士でも百姓でも何んでも彼でも悉く信者にしてしまふ法力は確かに日本一の英雄僧と言はれるだけのものがある。毒鼓や安國論の威力を今更に驚かれるのであつた。

今度は道を轉じて縣道に出て金澤村へ行つて、其處から五六町を曲つた所に黒木の御所址を訪ねた。順徳天皇は遷幸の初國分寺に在して、後此の御所に移られたといふ。來て見て驚いたのは、遺址と稱する所は僅かに五六畝の廣さで、梅や椿や楓など茂みの中に木柵に圍まれた一塊の土が堆く、側に一基の石燈籠が立つてゐるだけの極めてささ

やかなものに過ぎないことであつた。一天萬乗の尊にましまし乍ら、よしや遷幸あつたとは言へ、雲井を隔つる海山千里の孤島に於て、而かも斯様な狹隘な域に、物事すべて御不自由に渡らせられたと思へば、何人も北條氏の亡狀に憤を發せざるを得ないであらう。此邊りに菊が茂つてゐるのを案内者に聞けば、天皇が御手遊に白菊の殊に清らかなのを愛でさせ給ひ、名を都忘れと呼ばれたのが今に其根を絶たず残つてゐるのぢやといふ。若し花に心があらば、定めし何時の秋も露を涙と宿した事であらう。斯んな事を想へば自ら愛菊家を以て任ずる余は其儘にして去るに忍びず、永へに天皇の御事を偲ばんものと、其根數株を掘取つて我庭に移植することゝしたのであつた。尙ほ此の近くに本光寺といふのがあつて、天皇の持佛であつた觀世音を安置してゐるが、三尺立躰の靈像で聖德太子の御作と傳へられ、今は國寶として保

護されてゐる。更に縣道を進むと正法寺といふ寺が道の近くにあつて、觀世太夫腰掛石といふのがある。何んでも永亨六年足利義滿の時代に觀世元清が故あつて當國に流され、此寺に寓して數番の謠曲を作つた遺蹟だと傳へられる。それかあらぬか當國には謠曲が流行し、獨り觀世流のみならず吾が寶生流も盛に行はれてゐるさうである。

轅をめぐらして河原田町に近くと巍然として高丘の上に峙つてゐるのが獅子ヶ城址に在る佐渡中學校である。乃ちこの麓で車を捨て、高丘を攀ぢると校門へ著いた。時恰も暑中休暇で森閑として人聲もせない。玄關で刺を通ずると書記本間保徳氏が迎接せられた。蓋し此校初代の校長は同郷の知友大島多計比古氏、其二世は親友八田三喜氏で、八田氏からは非此校を一見せよと勧められたので、態々でもないが立寄つた次第であつた。來意を聞終つた本間氏は非常に喜び、創

立以來奉職して兩氏に世話になつたことも少くないとて種々學校の事に就て語られ、尋て校内隈なく案内をされた。成程八田氏が一見を勧められただけであつて、地域が廣く校舎や運動場の設備が行届いてゐるばかりでなく、頗る形勝の地位を占めて、近く越の松原を透して眞野灣を一眸の下に萃め、右には此島の二見浦左は三崎を望見し、又背面には國中第一の高嶽たる金北山の突兀たる姿が仰がれるので、東海道なる興津の清見寺で見る景色に似てゐるのである。斯んな場所で教育されて、それで人材が出ない筈がない、若し出なければ種が悪いのかなどと思はせるのであつた。此校の敷地は元と東福城とも云ひ又た俗に屯所とも言ひ、當國最初の守護本間右馬允能忠の子能久の開いた所で子孫世々茲に居つたが、天正年間に上杉景勝の爲めに攻略され、徳川氏の初までは一國の治府も此に置いたが、元和四年以來廢墟となつて

ゐたのを、明治三十年中學敷地としたのであるといふ。國亡山河在の詩は聞くが、こゝは城が亡んで中學が出来、劍戟の巷が此國の文化事業の中心となつたのだから、寧ろ喜ぶ可きだなどと、四方山の話に時を移して辭し去り、河原田へ逆戻りして、江戸屋旅館へ投宿した。此町は鎌倉時代に守護所を獅子ヶ城に置かれた時から一都邑となつたといふから、邊鄙としては古い歴史を持つた町であるが、それほど古い割合には發達せず戸數も五百、人口二千三百、相川や兩津の後に睦若としてゐるが、相川、赤泊二線の交叉點で海運の便がある爲め國中の要區となつてゐる。

下

翌七日も亦快晴であつた。早朝から町が何となく騒がしいので何かと問へば、國中を通じたマラソン大競争がある爲めぢやといふ。先

程から此宿にも多人數集つて、勇ましい姿をしてゐるのも其爲であつた。何んでも五人宛驛送りの手筈で今や來るかと思構へて居るのぢやさうで、勇壯な活動振を見せてゐるのは頼母しい。八時に相川から來た自動車に乗つて此の宿を辭した。途中金澤村に入ると明治記念堂といふ建物の屋根が望まれる、是は日清日露日獨各戦役の當國陣歿者を合祀し兼て其遺物を蒐集陳列して其英靈を慰め且つ千歳の下懦夫を起たしめんとしたものである。尙ほ堂側に開導館とて、諸種の器物標本等を陳列して汎く縦覽に供し島人智識の啓發を圖つてゐるものもある。何れも眞宗の僧故本莊了寛師が熱心なる勸化の力になつたものであるといふ。末法の世の中に、斯様な國家的奉公事業殊に開導館の如き文化事業を起した僧のゐることは推獎に値すると思ふ。又此村の大字中興といふ地に農會堂があり、農業家の俱樂部とし郡農會

及農事試験場を附設してゐるさうで邊土遠境乍ら諸事に勉強してゐる跡の見えるのは感ず可きであつた。時餘の後に兩津に著き、茲から新潟行の汽船に乗つて余が積年の憧憬の的ともいふべき佐渡ヶ島根と袂を分たうとするのである。

僅かに二日に過ぎない短い淡い契りであるだけ、今去るに望では何んだか後髪を引かるゝ心地がせぬでもない。見残した名所舊蹟も多し、未だ佐渡氣分といふやうなものに十分に浸りもしないのである。併し一斑を見て全豹を察しられぬこともない、茲に別に望で聊か地誌等によつて知り得た所を概記して名残としたいのである。

佐渡は日本海中に置忘れられた孤兒である。孤兒乍ら根性は曲らず、素直に柔和な姿で蹲踞つて居るのである。それで東南には其母親とも見る可き越後の國を懐しげに見やつて對立し、東北は其の父親で

あるらしい兩羽の山岳を遠くに望である。西南には兄弟分であるが取残されずに居つた越中や能登を眺めやり、西北はたゞ洋々たる大海に面して朝鮮や露領と寂しげに相見るのである。廣さは東西十三里、南北二十六里、周圍五十三里、面積五十六方里といふから孤兒としては大きな體格である。地勢は恰も工字形をなし斜に南北に延び、中央に平坦の沃地があつて國中平と呼び、東西には海水が著しく彎入して東には兩津灣、西には眞野灣を成して居る。此の東の灣から西灣へ至る國中平の前後には、それ〴〵山脈が蜿蜒として走り孤兒の骨をなして居る、前のを小佐渡と云つて其中に海拔二千百三十二尺の東教山が頭を出し、後のを大佐渡と云つて、全島第一の高山たる金北山は其處に海拔三千八百五十八尺の眉をあげて威張つて居るのだ。此の二つの山脈から大小無數の川が流れ出るが、最も長流で灌漑の便が多いのを國

府と羽茂の二流とする。氣候は盛夏華氏九十三度、嚴冬も二十八度を下ることは少いと言へば、北に在る割合に溫和と言はねばなるまい。さて交通としては陸上には未だ鐵道の敷設を見ないし、國道も出來て居らんが、平坦で修築も行届いてゐる、縣道には近來乗合自動車の便が次第に開けたから鐵道がなくとも大なる不便はあるまい。海路は澤根及小木から直江津へ、赤泊から寺泊へ、兩津から新潟へ、それ〴〵汽船の定期航路があり、又北海道とも古くから船舶の往還が頻繁であるから、貨物輸送には事を缺かない。戸數は約二萬一千人口約十一萬六千と註せられる。産業は鑛業に著名な相川鑛山があるが、住民の多數は農業に従事して例の國中平から米を主産とし十六萬餘石を産出する。併し水産物が主要物産であるのは言ふ迄もない、近海のみか近來は此の島を根據として北海道遠くは西比利亞地方へ出漁するものがあつ

て、産出は巨額に上つて居る。此他に相川鑛山の土石を原料とした朱泥焼一名無名異焼といふ陶器があり、支那産朱泥の壘を磨する高尙優美なものであるから、見物客は皆土産物にするさうで、余も御多分に漏れず其一つを齎歸つたのである。澤根町の大字五十里から出る銅器、岩首村大字赤玉から出る赤玉石、なども珍重がらるゝものである。人物には儒者に圓山溟北、田中葵園があり、現代では益田孝、高田愼三の二實業家、代議士山本悌次郎、文學博士萩野由之等を出してゐる。斯んな田舎としては先づ有る方に數へてよからう。風俗は離れ孤島の爲めか醇樸で輕薄の風を見ない、其代り活氣乏しき感はある。但船著場の常として淫風は相當に盛んで、下婢を雇ふにも午後十時以後の外出を禁ずる時は給金を多くしても來手がないとは嘘のやうな眞であるといふから少々呆れる。要するに佐渡は孤島に似ず名所舊蹟に富み、風光佳

絶、天産豊富で、往時罪人が流謫されたからとて鬼界ヶ島のやうに考へては大間違ひ、來いと言たとて行かれよかと嘆づ可き所ではない。近來は汽船の便が開けたから、來いと言へば行かれる佐渡となつて、法華信者の渡航が多くなつたといふが、信者に委せて置いてはいかない、實業家も文士も政治家も皆宜く一遊を試むべきであらう。

概觀を頭に纏めたりしてゐる内に、船は午前九時半を以て出帆した。海産の新鮮な魚類を満載してゐるが、併し來た時のとは違つて、佐渡商船會社の佐渡丸として二百噸積の新造船で、客室なども綺麗で乗心地がよかつた。海路平安十一時半新潟に著き、直ちに八田氏の邸を訪ね一夜の宿を頼むことにした。

吾が八田氏が東京第三中學校長として在職せられた永い間は時々會合の機會を得てゐた。其頃に氏が同窓の學友中で行政官若くは實

業家になつた人々は皆既に顯要富貴の地を得てゐるのに、恬淡な氏は毫も是等を羨まず固く其本領を守り飽くまで教育家を以て自任し、一中學校長の地位に安じて十年一日の如く黽勉少しも怠らなかつたのは、氏が人格の高潔なるところで、竊に敬服せしめたのであつたが、近年選ばれて歐米の學事を視察して歸朝すると幾もなく擢られて此地の高等學校長に榮轉せられたのは固より其所である。本校は新設の事として創立の事務が多端であらうが、氏の人格と手腕と相待つて好成績の擧げらるゝ事は期して待つべきである。氏は謠曲を好み令閨亦其趣味に遊ばるゝので、見臺に向つて三人交るゝ數番を謠ひ續けて半日を楽しく過すことが出來たばかりか其爲め晚餐の饗膳殊に美味を加へるのを感じた。對食中に明日の行程は新發田を経て村上、瀬波に赴き、海府浦の絶勝を探つたら面白からうなど、種々計畫を話してゐた

のに何ぞ測らん京地の親戚樋口家の老母が病死したとの電報に接したので、總ての計畫も晝餅に屬し、明日岩越線により歸京を急ぐことに決した。食後は氏が面白き談話に覺えず更を移した。

十一 岩越線から歸京

翌八日も亦快晴。早起して八田氏が書齋で寫眞を撮られた。これを何よりの好記念物として午前七時半別を告げて辭し、八時二十五分新潟驛發の汽車に投じ、新津驛から岩越線に入つた。線路は是から阿賀川の峡谷に沿ふて登るのだ。此川は信濃川に次ぐ北越の大河で、水源を岩代國に發し、會津地方の諸水を次第に綜合して北越の平野を横斷し、新潟港に近い松ヶ崎に注ぐのである。其流域中で十五里の間は舟行自在にして昔時の交通は皆此の水路に依つたといふほどあつて、

迂餘曲折が多い。兩岸には白い花崗岩石が屏風のやうに立ち列んでゐるなどは多く見ぬ趣である。溯るに従つて景致は次第に幽翠を加へ、彼の谿此の澗、一送一迎殆ど暇がない。晩秋錦繡滿山を染める頃は、どんなに美觀を呈するであらうと思はせ、恰も肥後の球摩川を見るやうな快感を覺えた。但十數箇所の隧道を出入して煤煙に苦められるのは閉口で此處等こそ迅く電力にしたいものである。東蒲原郡役所の在る津川を経て岩越境界の山驛たる徳澤で阿賀川に分れ、喜多方を経て若松驛に達した。茲が即ち會津で國中第二の大都會であるから是非下車して程近き東山温泉へでも入浴す可き所だが、何しろ急ぎの旅とて其儘に打過ぐると、先年の噴火で名高くなつた磐梯山が車窓に映る。次で猪苗代の湖光も見え初める。それから郡山で東北本線に入るまで百八哩の岩越線は可なり目を娛ましめる山又山に富んでゐ

る。是より能因が秋風の白河關に思ひを遣し、釣天井の宇都宮にて日は暮れ、上野に著いたのは午後十時三十五分、家に入ったのは早や午夜近くであつた。今日十三時間の乗詰めを左程に勞苦と覺えぬのも、畢竟は閑地自適の賜であると、其儘快よき眠に就いた。

庚申北遊雜記終

跋

余が甲寅羽鳳行記は旅中携帯の手帳に記せし日記にして固より人に示すべきものに非ず。但親友中の親友たる河合君が余が曾遊の地に遊ばんとするを聞き、幾分参考たらんかと思ひ、恥を忘れて之を示したるのみ。然るに君は行く可くして行を果さざりし部分の補遺として、君が庚申北遊雜記の附録とし收載せんことを求む。外ならぬ河合君が言なれば否み難く遂に承諾すること、せり。

從來河合君は遊あれば必ず記あり、記あれば必ず之を親友に示し序跋批評を求むるを例とす。余の如きも亦其命を受くる既に數回に及べり。然るに今春河合君來訪し、今回の記行は例の如き批評序跋を廢すと宣したるを以て、余は心竊かに作文の苦患を免れたるを喜びたり

しに、豈計らんや批評は之を許すも、羽鳳行記を附録としたる因縁上是非一言の跋辭なかる可らずとの嚴命に接せんとは。今更君が作戰の巧妙なるに驚きたるも、既に其術中に陥りたる以上は逃るゝに道なく、敢て秃筆を呵して戦闘場裡に立つの止むなきに到れり。

然れども病夫元來思索に慵く何等銘案の胸中に浮ぶことなし、唯一讀の際に小間肅稻垣示二氏の名あるを見て感慨之を久うするものあり。二氏は當時北陸地方有名の政客にして、其性行の皓潔なる到底今日の所謂政治家に見ること能はざる所のものありたり。余は當時後進の青年なりしも、時に稻垣氏等と干鱗を割き樽酒を引いて自由民權を論じたることあつて、稻垣氏は深く之を知れり、今に至る迄其氣節に富みたるに敬服せり。又小間氏とは親く交らざるも、彼が正義議論以て目のあたり岩村高俊知事を屈伏せしめたるを觀たる事あり。又縣

會開會中は決して知事の招宴に應ぜざりし如き、今日の人には見ること能はざる氣概の存せしを認め尊敬せざるを得ざるなりき。而して當時河合君は縣會の書記たりしも、其控席に出づるや直ちに議長の賓客の如く、議長と同格に他の議員と議論を上下するなど、其名は書記なるも其實は幹部議員たるの觀ありき。且つ其系統上小間稻垣氏等と其所屬政派を異にせし爲め、兩氏とは劇論を交へたること一再ならざりしを記憶す。今にして之を想へば實に隔世の感あり。若し勢運が維新當時の如く氣魄節義をのみ尊重したらんには、諸子の如きは時に或は廟堂の偉材となり得たらんも未だ知る可らずといへども、時運は爾く單純に進行せず、政界は單に直情徑行の人のみを以て満足せずして、所謂政治家てふ術策家を要求する事となり、爲めに小間稻垣二氏の如き世と逆行して凋落し去れり、洵に遺憾の事といふべし。而して此

の記を見るに稻垣氏は猶銅像の舊里に存して古を偲ばしむるものあるも、小間氏は末路甚だ振はずして終り、其故郷の家すら今誰れの有たるやを知らず、豈に亦悲しからずや。

然るに吾が河合君は能く時勢の推移を洞觀し時に従つて宜きを制し、志業意の如くなりて其初心を失はず。長生六十の今日に及び自由自在の境涯に生息し、天上天下誰一人氣兼するものなく、眞に唯我獨尊の實を示し、出遊しては舊友恩人は勿論昔時論敵の跡をも弔して一視同仁し、大願成就福徳圓滿悠々自適す、誠に日出度き限りといふべし。今小間稻垣二氏と河合君との昔時を想ひ今昔の感に堪へず。茲に之を記し以て北遊雜記の跋となさんとす、河合君果して首肯するや否や。

大正十年四月

松 坡 奥田頼太郎

越路のゆき、

省 齋

辛酉二月越後青海にわれら豫てより營める事業の司村田虎一郎氏みまかりければ同地に赴き途すがらよめる

往復とも夜行寢臺車の上に横りて

往ききする長き旅路を夢の間に安けく過ぐる寢臺の上

汽車中圖らずも往きには青木外吉氏(石川縣立工業學校長)歸りには小黒安雄氏(在金澤日本硬質陶器會社専務取締役)と乗り會ひて

ゆくりなく親き友とかたらひて時の移るも忘れける哉

直江津にて夜も明ければ

北の海磯うつ波の荒ければおりたちかねて千鳥鳴くなり

姫川の鐵橋を過ぎて

瀬をわけて細く流るる姿こそ名もふさはしきおもひこそすれ

越路のゆき、

姫川増水の時を想ひ出て

姫川の名にはたかひて水かさのうつまく流れ想ひやらるる

山野の残雪を見て

三越路はまた春淺しをちこちの野山に雪の白く積りて

日本海の怒濤を眺めて

親知らず子知らすの磯間近なり逆巻く波の物凄く見ゆ

村田氏の死を悼みて

思ひきやまた青海の若き身を荒波立ちてさらはるとは

故村田氏の靈前に拜して

君逝けり逆縁なから弔はん南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

故村田氏の補缺として村長雜賀權造氏に水電石灰の兩會社及び軌道
商會の各重役兼任を委ねければ

諸人の爲と思ひて努めよや業しけくして荷は重くとも

用事果て歸京に際し關係の人々を招き小宴の席上にて
謀り事落ちなく了へて喜びを心許りに祝ふさかつき

歸路曉天に妙義山を眺めて

春霞み棚曳く空にそりたてる白雲山の峰の曙

熊谷堤の櫻樹を見送りて

熊谷の堤の櫻花咲かは人とよもさん春し思ほゆ

浦和附近の平野を眺めて

武藏野は霞こめつつ麥畑の畔の梅か枝ふふみそめけり

飛鳥山の櫻樹を見て

飛鳥山煤の煙りに名にし負ふあたら櫻の年に枯れ行く

鶯谷驛に下車して

此頃はいつくわたるか聲たえて鶯谷は名のみなりけり

松坡奥田頼太郎著

甲寅羽鳳行記



甲寅羽鳳行記

松坡 奥田 頼太郎 著

予は明治三十二年四月七尾中學校に就職せしより、既に十有六年の春秋を重ねたるが其間夏季休業中と雖も何かと校用ありて私の旅行に出向くを得ず久しく能登の中心とも言ふべき七尾に居ながら羽咋鳳至の二郡に於ける名ある町村すらも未見のもの多きは日頃遺憾とせし所なりき。幸ひに本年は障る事少きをもて八月三日より同八日迄其筋の許を得て右等の地方に遊ぶこと、せり、然るに三日には水泳、柔道の修業式を擧る校務あり、爲に一日を延し、いよ／＼四日に出發と定む。

是より先、三男立夫は越中立山に遊ぶの豫定なりしも、同伴者を失ひて中止するの止むなきに至り、予の行に隨はんと請ふ。予も單獨より同伴者ある方便なるをもて、直に其請を許し、猶塵外旅行の一興として、會計一切の事は立夫の割出す寸法に一任するを約す。斯て四日朝食を終るや、父子が扮装は綿縮の半袖シャツと同じ地の半ヅボンに身を固め、脚絆を引締め、辨當は綿薩摩の頭陀袋に納めて、銘々肩より下げ、其上に吳産を著け、帽は昨夜買取りし許の新物にて、鉋屑製の上等品、其價畏くも七錢と云ふを戴き、折柄の雨を衝いて我門を出づ。

雨は降れども蒸し暑きこと甚しく、三島町の波止場に至りたる頃早や汗は腹背に流る、此所にて中島行の小汽艇に乗りたるが南風烈しく起り、雨益勢を加へ來りたれども船中なれば差したる苦もなく、乗合の知人と泰平樂を並べ居るもの、上陸の上は小雨となれかしと心の中

には勝手なる祈願を込めつゝ、進む程に、九時過船はやがて中島へと著きたりける。俄祈りの驗もなく、雨は益強く誠に車軸を流すとは此事かと思ふばかり、暫し人家の軒に雨宿りし、雨脚や、衰へたるを見て爰を立ち出でたり。

此地は片田舎には珍らしく飲料水道の設けあるをもて其水源地に登り、あたりの模様を視察せり、當村は嘗て飲料水不良なるが爲め動もすれば悪疫に侵され、二三年前にも赤痢猖獗を極めたる苦々しき經驗はやがて此進歩したる衛生的設備を出したるを思ふにつけても、人生進歩の動機は苦がき、經驗多きに居る杯と語り合ひつゝ、一互り中島村の様子を知り得たり。尙木下良氏經營の瓦製造場を一見せんと欲せしも、其場所の少しく離れ居ると、雨なほ烈しきとに由り遺憾ながら抜きにして富來の方に向ひて歩を進む、此より數里の間は唯小農村の點

綴し居るのみにて、別に記すべき程の事もなく、只折々大厦高樓の如きものを望みて、之に近けば寺院にあらざれば神社か學校なりき。十時過不圖一人の老翁と道連となり前路種々の様子等を聽き得たるは此上なき好都合なりき、十一時頃此老人と別れ、道は登り坂となりたる頃雨霽れて烈日燉くが如きの晴天と變り總身の濡ほひ乍ちに去りたるは、心地よき事限りなし、暑氣一入加はりたるに坂路の長く續くには餘り辱なき感じもせず、折から道は樹陰に入りて涼氣人を襲ひ來る、乃ち道側の石に腰を据ゑ何彼と語り合へる内、食事には尙少し早けれども又々休まんより序をもて晝食を濟まさんと協議一決、行李を開き梅干に澤庵の握飯も大牢の珍味父子とも瞬時に之を片付たり、五十の坂を越したる予さへも少しく量の不足を感じし程なるが、まして十七血盛りの立夫には腹應へのなかりしは云ふ迄もなき事なり、肥馬輕裘の上

流社會にありて、八珍を前に敷きながら猶美味に飽かずと云ふ連中は、ちと我黨の伴を爲さば可ならん杯、勝手な駄法囉を吹きつゝ、漆上の方へと登り往く、此邊は近年金鑛を出し爲に一二暴富をなしたるものあるより、我も我もと試掘に掛りたると見え、到る所に小規模の採鑛場を見たり、午後二時頃富來町に著す。

豫て教へられたる富來館と云ふを尋て其家に入りたるが、流石は田舎宿屋にて、玄關らしき所はあれど何となく廢れ果て壁間には見苦しき樂書杯多く一見好き心持せざるに搗て加へて我々客人が玄關へ指し懸り居るに、しかく、取次ぐ者もなく去らばと云うて女中が居らぬ譯にもあらず、横手の入口の方には人影も見え又がやくと人聲も手に取る如くなるに、取次の出で來らざるは田舎者の氣の利かざる事よと小腹も立ちたるが、後にてよくよく考ふれば我等が旅裝の餘りに振

ひ過ぎたるが彼をして遅々たらしめたる一因たる事疑なし、斯て草鞋を脱ぎ足を洗ひて、此家の女將とも云ふべきに導かれ奥の方へと通りたり。向ふには薄闇き古びたる座敷三ツ四ツ見えたるゆゑ扱は彼室へ入れらるゝならんと度胸を据ゑたるに、左はなくて更に奥まりたる細暗き廊下へと導くにより今は早や心細く屠所の羊然として従ひ行くに、斯は如何に廊下を通り抜けて藏前を左へ折れば、今迄と打て變りて新らしき十疊二室と外に附屬室二ツある東京風の座敷へ案内せられたり。此時の心持はまた格別なりき、暫らくして茶は運ばれ西瓜も出で、取扱も左迄失敬なりと感ずる程でもなし。やがて天氣も益晴れたるにより海水に一浴せんと二人打連れ海岸に出でたるが二三日來の風雨に海水は濁り怒濤岸を嘯んで凄まじかりしも何程の事かあるべきと父子諸共に飛込ぬ。遙か後方より大聲を揚げ兩手を振り何か

我等に注意するが如き者を認めしにより怪みながら岸へ上れば、彼も案外らしき顔付にてヤアー奥田先生ですかと云ふ、これは五六年前我校にありしも家情の爲め金澤第一中學に轉じ、今は新潟醫專の生徒たる葛城と云ふ男にて、此處の海は恐るべき處なれば浪の荒れたる時には入るべからざる事を細々と説き出でたり、此男の親切なる心根に深く感謝の意を表して宿に歸る。此町は我校の生徒一人も居らざる故立夫が訪ふべき友人の家もなく、父子が思ひ／＼の事を書き、在米國の次男大陸の許へ送り後には無聊のまゝ、五目並べ杯して遊び居たるに、やがて家人は夕食を運び來る、風呂は如何にと問へば今日は立てざる日なりと答ふ、誠に氣樂なる家業の仕振りに驚きて二の句も出でざりけり。夕膳に向ひたるに「ゴマメ」に鹽鯨、胡瓜の酢もみと云ふ獻立、偕も殺風景を通り越したる次第なるも天候の結果漁場の常と思へば不平

は却て此方の無理と寛恕したるが、魚類で名のある此地に來りて如斯
とは誠に肴に御縁の薄き事どもなりける。但し此旅館今に猶忘れ難
きは我々の室と定めたる十疊二室は、建築の新しき而已ならず用材も
上等にて、廣々と心持よく風通り誠に宜しく、不斷涼風そよよと吹き
入り此大暑の時節に夕食の時には、單衣を重ね、朝食の時は風を厭ひて
障子を閉める杯是而已は得も云はれぬ愉快の事なりき。

五日朝は、夙く起床せしも朝食には間もある様子此暇にと、父子打連
れ此地の所謂朝市なる者を一見す瓜、茄子、鹽漬魚類杯の露店町の兩側
に並びて客を引き何平方言にて、賣り買ふ有様迎も大正式にはあらず
れども一見の價値ありと云うて可ならん乎。やがて朝食を終へ七時
頃出發劔地の方へ向ふ、時に狐の嫁取り式に降雨一過忽ち晴天となれ
り。途中立夫會計の曰く、昨夜は一泊五十五錢茶代は十五錢置きたり

と、學生旅行としては上等の方ならん乎と一笑せり。劔地へ行く道は
往來の人極めて少なく又道路も所によりては岐路に迷ふ所少なから
ず、他の道に迷ひ入りて引返したること數々なりき。斯て往く程に一
人の道連を得たり、年の頃は五十餘りにて中々の話好き又若き頃は金
澤に出て河波の塾本多町に在り漢學を教へし所に居たり杯と話す此
男極度の近眼にても有るにや、予等父子を兄弟と認めて談話の間にあ
なた方の様な若き人をと繰り返へしたる事特に可笑かりき。又此男
の話の中に十町許り道寄りすれば往昔源の義經が野營せしと云ふ名
所ありと、聞きたる父子は相談の上其方へ迂回し尋ね往きたるに、深々
たる荆棘の中を潛り往くこと數町にして白岩と云ふ所に達せしも、源
九郎が宿りし形跡杯は見度とも無し、唯巨巖浪打際に峙立し、風濤之を
打つ毎に巖上俄に數條の瀑布を掛くる所壯觀實に言語に絶せり、斯て

三十分許り此所に休みて後又も荆棘の道を潛り元の所へ戻りける。
十一時頃劔地を眼下に見下す所に著く、此所風景亦絶佳、近くには數
日來の怒濤の餘威猶すさまじく、遠くは地平線上一大汽船の優々とし
て、長き煙の尾を引くあり、幸ひ路傍好適の木陰ありたるをもて吳塵を
敷き晝食の場所と定む、不相變梅干入りの握飯に水筒の水而已なるも
旨き事譬へん方なし。斯て正午頃劔地へ下る、聞き居たる程の所にて
はなく言はゞ漁村に毛の生えたるが如き所なりき。夫より里島と云
ふ所に出づ、此處は從來餘り其名を聞かざりしに却て家並も宜しく町
の形勢も何となく富裕なる様に見受けられたり。茲より一里足らず
にて道家と云ふ村に達す、此村は道幅頗る廣く各農家は昔の武家屋敷
の如くに並び其村名と云ひ何か由緒のある所ならんと考へつゝ、行く
こと數町にして通稱門前に著す、是は總持寺の門前と云ふ意ならん。

此門前の入り口櫛比村字館と云ふ所に堂前と云ふ舊家あり、此家の長
男義久は數年前我校にありたる者にして其後東京に遊學し居ると聞
き居たれば、今其家の前を通りつゝ、彼の事を思ひ出て不圖見れば遙の
屋腰に義久のぶらつき居るを見たり、彼も亦此方を見たるも怪しき風
體なれば予とは識る由もなく、予も聲を掛けんかと思ひしも斯くては
彼に意外の心配をさする事ともならんかと思ひ、態と素知らぬ顔して
通り過ぎ、總持寺の方へと足を向けしに彼も予とは氣付かず談敵少な
き田舎の事故學生ならば東道の主人たらんかと思ひて乎、我等の後を
慕ひ來て予等が寺内の一字を見つゝ、ある所へ、突然ヤア先生と呼び
掛けて驚きたる様一興なりき、夫より相携て總持寺内を一巡するに、今
は本山の資格を失ひたる事故、規模の小なるは勿論なるも元來の境域
狹隘なるより考ふるに、元とても越前の永平寺に及ばざりしや疑なし。

寺前に大野館と云ふ宿屋あり入りて宿す、昨日來路人に聽きたる所にては此宿は當地第一等と云ふ由なるが矢張田舎宿屋たるを免れず、客の五六組もあるに拘らず此大暑中毎日風呂すら提供せぬと云ふ有様なり、又其座敷はほんの下宿建にて富來館にも及ばざるや數等なり、又夕食の膳と云ふも取り立て語るべき事なかりしも數里歩行の後とて食の進みたるは給仕の女に少々氣の毒なる位なりき、此町には我校の生徒多少居るゆる食後立夫は彼等を尋ね行きたれば彼等は皆袴を著けて予を來訪せり、由來門前地方は總持寺僧徒の餘風を受け一般に思想の進み居るは此一事にても知らるゝなり、彼の一時有名なりし小間肅の如きも此地の産なり、日暮より堂前義久も來り主客五人淡泊なる茶菓にて十時迄談笑す、堂前生は何を思ひたるにや頗と予に勸めて次の選舉期には必ず衆議院に打て出でよ、自分は極力盡力せんと誓へ

り、是は此男の眞心にて疑ふべくも非ざるが何等社會に勢力を有せざる彼の言ゆる只其好意を謝して別れたり。

六日早起すれども家人猶起き出でず、且此家の井水混濁にして不潔に感ぜしをもて堂前生の家に往き洗面し、七時門前を發す、星野生送り來る事里餘なり、立夫會計曰く昨夜は宿料一人六十錢にて誠に價値なかりしも友人も居りたるゆる茶代二十錢を與へたりと、斯て輪島に向て往く程に一老人の道連を得たり、此老人の言ふには商用ならば格別遊びかたぐ、輪島に行くならば、二三里は廻り道なるも無趣味なる櫛比本道を往くより浦上村山間を横切り、大澤と云ふ所に出でらるゝ、方遙に面白からんと三里の延長はチト耳障なりしも、好奇心押へ難く豫定を變更して其方へ向ふ事に決し、乃ち浦上村にて卒業生鳥毛麟の家を訪ぬ、此男我校に在學の日は頗る腕白ものにて又滑稽を以て全校に

鳴りたり、元來才氣ある男にて徴兵として入營するや、長上の認むる所となり、在營一年にして歸休を命ぜられ、目下道家の學校に教鞭を振ひ居るが暑中休みで折よく家に在り、よつて山中間道の案内を頼みしに快諾して出で來り山間二十町餘濁池と云ふ所に到り、爰にて五年生竹本なる者を呼び出し之と交代して鳥毛は歸宅す、是より竹本生の案内にて遂に男女瀧と云ふ名所に出づ、茲は山と山との間に幅二十間高さ五六十間とも見ゆる傾斜せる平面の石底へ山上の河水一時に放落し懸りて數條の瀑布をなせるものにて實に天下の奇觀なり、斯る瀑布が大都會でなくとも、輪島附近にてもあらば、夙に名を天下に成したるならんが、惜哉案内者なくては往けぬ山中の事とて予の如き物好き者ならでは訪ふ者もなしと云ふ、此處にて竹本生を返し我等は教へられたる小徑を辿りて暮坂樽見を經大澤の海邊に出づ、其よりは幾度となく

山の尾の海に衝き出たる所を廻り坂路を上り下りし居る間に早くも正午頃となれるをもて、途上の木蔭に吳産を敷き晝食を終り、又々山の尾を廻りつゝ、坂路を上下す、此間最注意を要したるは蛇と蝮とにて幾度か心魂を消したるも幸ひに事なきを得たり。

赤崎村となん云ひし所の某氏が庭に、數百年を経たる躑躅の老株あるを聞き、立寄り一見したるに、一株の霧島凡そ三間四方とも見らるゝ間に蟠居し、其幹枝龍蛇の起臥する如く、誠に珍品たるに相違なし、今は花なき時とて只其古木を賞するに止まる。予の考には躑躅の如きは老株より若株の枝繁くして花多きこそ麗はしけれ、枯木に似たる一老躑躅何程の價值あらん、凡そ世の中に元老杯と云ひはやす人も、此類ならんかと評しつゝ、又新たななる山の尾を廻り、午後三時頃光浦に著く、此海邊に細き清水の落ち出るを見、走り寄りて之を掬したる時の

心持は其境に入らざる者には説明の道なし、斯て氣力を一新して往く程に海上喧囂一群裸體の姿あり、遠くより視れば色飽迄赤黒く肉附違ましくして、偉丈夫の如くなるも其聲極めて金切りたるより怪みて近づけば何れも女にて終日海中に浮沈して生を營む海人なりき、同じく人間と生れ金殿玉樓に贅を極むるもあり、又此海人の如きありとは天意も如何と思はる、が、彼等は一家の主力として其威勢亭主を凌ぐに想到すれば、晝夜愁涙を呑んで瑤臺の裏に一生を空過する底の人よりは、精神上の愉快と幸福とは却て此海上の人にあらんか、杯つまらぬ考も浮びたり。

此見憎き活劇場を過ぎ行くこと數町輪島町外袖ヶ濱に至る、我等は海水に一浴し朝來の汗を洗ひ去り輪島町いろは橋畔の廣谷旅館と云ふに投宿す、予等父子を何者と見たる乎餘り好き室へは導かず、尤も斯

る事には心を勞せざる考にて出たる旅行ゆる何とも思はざるに、此家の内に予を識りたる者ありたりとて俄に亭主は菓子と名刺とを持って挨拶に来る、斯くなりたる上は別に遠慮にも及ばぬゆる浴湯を催促せし所、先登第一に案内せられ一浴二三日來の污垢を去りぬ、扱て夕食ともなれば、今日は漁もありし筈なるに鯛一色の總攻撃とは誠に心配少き料理法なり、是は此館の主人たる者漸く十六歳の青年なるが才子らしきも未だ智慮が全般の事に廻はり兼ねるに由るならん、夕食後立夫は出て友人を訪ひ予は止まりて漆器商某を招き大阪住友家の鈴木馬左也氏に贈る爲め誂ひ置たる硯箱の今猶半出來の物を驗せり、八時頃室を三階に移す、是は優遇の意味ならんが不便一方ならず又隣室に一大酒宴を始むる者あり、酒豪の予が素面で他人飲酒の活劇を見聞せしめられたるは吾に下したる天の報酬ならん、十時過立夫は友人を連れ

て歸館す、此男は四年前我校にありしも其父死して學校を退き今は一寺の住職として活動し居る様子にて應接振り中々世慣して十一時頃迄話し込まれたるは、旅中を慰むるの心遣ならんも百度以上の日光下に登り降りして來れる予等は、有難迷惑の感なき能はざりし。

七日早起すれども不相變宿屋は起きず、依て父子相携て此地の市を見るべく外出す、富來と大同小異なるが、如何にも古代めきて電話や電燈と釣合が取れず、蒸鮑を求め辛うじて少許を得たり、七時宿を發す立夫會計曰く昨夜の宿とても門前富來と待遇振には大したる差はなく只浴湯の有つた丈にて宿料は八十錢なり、乍去素性を識られたる上は表向の旅に非ずとも錢位の茶代にては如何と思ひ、清水の舞臺より飛び降りたる心持にて圓位に進めたりと、中學も五年生と成れば少しは融通も利くがゆゑにや、輪島町は四五年前の大火後町區改正を行ひた

ると見えて、十數年前に見たる輪島とは打て替りて好き町となれり、之に比して七尾は遜色なしと云ふべからず。

此町を出てより穴水迄五里餘の間は、往々にして清水路傍に湧出し歩行者や車力の爲には實に無上の賜となる、汗の湧き出るをも顧みず又しても、牛飲を極む其快言ふべからず、十一時頃穴水町端に來る「サイダ」製造所と云ふ看板を見て冷したる者ありやと問へば有りと答ふ、直に入りて父子各三本を傾けたるは我ながら飲み過ぎに驚きたり。序に此家にて握飯を濟まし午後一時頃當地の事業家宮森乙次郎氏を訪ふ、今より六年前次男大陸を連れて此地に來りたる時、中尾の人米田孫八氏の案内にて青島と云ふに一泊したる事あり、此の青島と云ふは穴水を距る約一里海上の一孤島なるが、宮森米田二氏共同にて眞珠貝養成場を置き傍別莊となす、全島青松を以て満ちたるが故に此名あり

と云ふ、人煙至らず誠に好仙境なり、且海上の孤島とて、東西南北何れの風も此松蔭を過るが故に避暑の地としては、比類稀なる所なりしと想ひ出し、再遊の念禁ずる能はず、門前より宮森氏宛一書を出し一泊を依頼し置きたるなり、依て同家にては午前中より予の來るを待ち、人車の音を聞く毎に、扱は來著かと思ひ居たる由なるに、突然極度の彌次喜多が入りたるに一驚を喫したるならん、但後にて聞けば、予が小林全信師より貰ひたる綿薩摩の古頭陀が此家の子弟教訓の材料となりたりと云ふ、扱余の入りたるを見るや、令息彌太郎氏は酒藏より冷したる「シトロン」を取出して饗せらる、時に取りての醍醐上味、一氣に之を失敬して後家人一同に面會し、夫より彌太郎龜次郎兄弟と共に青島へ向ふ、中居の米田氏も予の來るを聞き、今朝既に其長男金久を伴ひ、彼の島に渡り居ると云ふ、いよゝゝ一行島に著きたれば米田氏迎ひ出で、湯も湧き居

るゆる直に入れと下にも置かざる取扱振りは二三日來の旅館に比して霄壤の相違なり、予は先づ海水に一浴せんと、四人の青年と一小艇を押し出し、島を離る、數町の所にて遊泳を試みたり、米田氏は止まりて料理の差圖に餘念なし、やがて夕食となれば、穴水川の鮎膳に上り、酒は宮森氏の上醸、一同卓を圍みて飲み且喰ふ、予と米田氏は彼の上醸、卒業生二人はビール、在學生はシトロンなり、食後予は直に寢に就きたるが、青年等は猶打寄りて談話を交るもあり、又松林の下涼風に浴しつゝ、尺八を吹きたるもありけり。

八日朝早起、昨晚餐の時の約束にて今朝六時より一時間靜坐する事となる、即ち定刻に始め定刻に終る、斯る所へ穴水より乙次郎氏家鴨と鮎とを携へ到り晝食の料に供せらる。予等海水一浴の後此の美味に接す、尙一泊を勧められたるも豫定の日數此日を以て盡くるにより餘

波惜しくも他日を約して袂を別ち、穴水より汽船にて五時過る頃七尾に著せり。吁此四五日間は胸中の俗氣全く絶え二十年來始めての清遊なりき。立夫も平生父と事を共にするの習慣なるが故に少しも面倒がらず、萬事予の意の如く取計ひ呉れ予も大に満足せり、予にして若し他日總理大臣となる事あらんには立夫は其秘書官たるの資格十二分を備へりと一笑せしは家に歸りて夕食中一家團樂せる話柄の一なりき。

甲寅羽鳳行記 終

北遊雜記竝に羽鳳行記の後に記す

省齋翁快癖再發し、頃日庚申北遊雜記を上梓するに當り其補足にせんとして、畏友松坡兄の甲寅羽鳳行記を附録とす、松坡兄は予も亦畏敬する友也、其記を一讀するに、行文筆端虚飾なき所、兄の流義を發揮し、間々慷慨的の片言隻語を挾む所、肩を欬て脰を張る兄の風貌自ら躍如たり、行記として流麗艶曲の美乏しと雖も其赤裸々たる記述亦一種の味ある好文と謂ふべき歟、翁の文章に至りては世既に定評あり此に贅せず、若し夫れ翁の遊記を主とせば、兄の行記は賓たるべく、主賓各其態を異にして、鴈去燕來の北陸の天地に對座す、情緒綿々として盡きず、雅趣湧き來るものあるを覺ゆ、彼の柘木の相合うて始めて音あるが如く、北遊、羽鳳二者相提補して離れざる所、紀行の完備をなす、所謂北陸道中の警柘

11
479

北遊雜記並に羽風行記の後に記す

二

たるべき歟、其響の大小は惰眠を覺すに足るべきや否は予之を知らず
と雖も洵に好配合と謂ふべし、翁が編綴の意も亦蓋し此に在らむ、况ん
や兩者が夫唱婦隨の類ならんには、一家の圓滿、一書の完璧、天下太平の
吉兆と謂ふとも、誰か敢て肯定に躊躇するものあらむ哉。

能登は寅加越は申の旅日記

縁起もよしと數ふ七つ目

大正辛酉卯月

上原霞風生

大正十年八月五日印刷
大正十年八月八日發行

非賣品

發行者 東京市下谷區上根岸町三十四番地 河合辰太郎

印刷者 東京市下谷區二長町一番地 米田久能

印刷所 東京市下谷區二長町一丁目 凸版印刷株式會社

終

